

授業計画(シラバス)

科目名	国語			指導担当者名	渡邊 智恵
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	前期		対象学科学生		言語聴覚士科1年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○日本語の文の成分を学び、各名詞の働き・意味を理解し、判別できるようになる。 ○長文の要約等により読解力を身に付ける。 ○自分の言葉を用いて文章にまとめる能力を身に付ける。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	指導担当者の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業 計画 前期	1	文の成分		言葉の単位と文の成分	
	2	連文節		連文節(主部・述部・修飾部等)	
	3	品詞分類(1)		自立語(体言・用言)、付属語	
	4	品詞分類(2)		連用修飾語、連体修飾語、接続語、独立語	
	5	品詞分類(3)		用言(動詞、形容詞、形容動詞)	
	6	品詞分類(4)		助詞(格助詞、副助詞、接続助詞、終助詞)	
	7	品詞分類(5)		助動詞	
	8	品詞分類(6)		これまでの復習	
	9	実力試し		一般教養(漢字・慣用句・ことわざ等)の確認	
	10	長文読解(1)		グループワークを通して文章読み込み	
	11	長文読解(2)		グループワークを通して文章読み込み	
	12	作文(1)		自分の考えを適切な表現でまとめる	
	13	作文(2)		自分の考えを適切な表現でまとめる	
	14	文献読解(1)		言語聴覚士の文献読解	
	15	文献読解(2)		言語聴覚士の文献読解	
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	医療英語コミュニケーション			指導担当者名	室井 由美子
実務経験	アメリカナショナル大学解剖生理学元講師			ST実務:	無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○人体の構造の各部位の名前を英語で覚える。 ○言語聴覚士が関与する医療英語を覚え、職場での会話を想定し模擬体験する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験結果に会話テストの結果を加味し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	人体の構造、身体各部の名称①		面、方向	
	2	人体の構造、身体各部の名称②		骨格系、脊椎	
	3	人体の構造、身体各部の名称③		頸部の筋肉	
	4	人体の構造、身体各部の名称④		諸臓器	
	5	人体の構造、身体各部の名称⑤		中枢神経系	
	6	STが関与する疾患①		脳血管疾患(脳梗塞)	
	7	STが関与する疾患②		脳血管疾患(脳出血)	
	8	復習		これまでの英単語の総復習	
	9	英会話①		初診(受付での対応)	
	10	英会話②		診療科の名称、症状表現	
	11	英会話③		痛みの種類、痛みの表現	
	12	英会話④		薬の服用、アレルギー	
	13	英会話⑤		模擬受診場面の英会話発表	
	14	英会話⑥		Health & illness 動画	
	15	英会話⑦		歌、英文抄読	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・前回学んだ内容を復習しながら授業を進めるのでその都度、単語をしっかり覚えること。 ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	スポーツ・健康			指導担当者名	村井 秀範
実務経験	スポーツ・インストラクターとしてスポーツ・ジムでの実務経験有り				ST実務: 無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○生涯にわたり心身の健康を保持増進するための知識を身に付ける。 ○自身のみならず、他者も明るく豊かな生活を営むことができるよう、身体を動かすことの楽しさを知る。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験結果に実技テストの結果を加味し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	身体を動かす楽しさを知ろう①	バスケットボール		
	2	身体を動かす楽しさを知ろう②	バスケットボール		
	3	身体を動かす楽しさを知ろう③	バレーボール		
	4	身体を動かす楽しさを知ろう④	バレーボール		
	5	健康とは	健康の定義、現状の把握、問題点		
	6	乳幼児の健康	年代ごとの健康の意義とスポーツの関係性		
	7	成人の健康	年代ごとの健康の意義とスポーツの関係性		
	8	高齢者の健康	年代ごとの健康の意義とスポーツの関係性		
	9	様々な障害と健康づくり	STが関わる障害と、患者様の健康対策を考える		
	10	体カづくり運動①	ドッジボール、他		
	11	体カづくり運動②	ドッジボール、他		
	12	体カづくり運動③	大縄跳び、他		
	13	体カづくり運動④	ストレッチ法、他		
	14	体カづくり運動⑤	ボクササイズ、他		
	15	体カづくり運動⑥	エアロビクス、他		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	教育学			指導担当者名	遠藤 さとみ
実務経験	公立小学校元学校長			ST実務:	無
開講時期	後期		対象学科	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○教育の概念と目的について理解する。 ○学習指導の原理と方法について理解する。 ○障害の種別と特徴および学校教育現場における支援の概要を知り、言語聴覚士としての基礎的素養を身に付ける。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	指導者自作資料・指導者所有DVD(「聴覚障害児教育の専門性を身に付けるための指導者用教材」)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	「教育学」を学ぶ意義	教育学とはどんな学問か		
	2	学ぶことと教えること	人にとってなぜ教育は大切か、教育の法的位置づけ		
	3	人の発達を理解する	人の発達段階と特徴		
	4	学習の原理を理解する	知識・技能・態度はどのように習得されるか		
	5	指導の基本を理解する(1)	良い指導者の条件		
	6	指導の基本を理解する(2)	通常学級における授業展開の基本		
	7	指導の基本を理解する(3)	通常学級における授業と個への配慮		
	8	指導の基本を理解する(4)	＜演習＞通常学級における授業案づくり①		
	9	指導の基本を理解する(5)	＜演習＞通常学級における授業案づくり②		
	10	指導の基本を理解する(6)	指導案発表と意見交換		
	11	障害に配慮した教育(1)	障害の種別と特徴		
	12	障害に配慮した教育(2)	特別支援教育の歴史		
	13	障害に配慮した教育(3)	聴覚障害児教育の基礎知識		
	14	障害に配慮した教育(4)	教育現場での工夫・配慮事項		
	15	言語聴覚士と教育	言語聴覚士に期待されること		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・思考力・表現力育成の観点から、毎時間「書く活動」や「話し合う活動」を多く取り入れます。積極的に取り組むこと。 ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	生物学			指導担当者名	室井 由美子	
実務経験	アメリカナショナル大学解剖生理学元講師				ST実務:	無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○生命の発生と営みの機序を知り、環境に応じてどのように変化していくかを理解する					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験、中間試験、グループプレゼンテーションを総合し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	系統看護学講座 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能① (医学書院) 講師作成資料、プリント					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	生命の起源		生命の起源 DVD		
	2	生物の多様性 細胞の化学成分		原核・真核生物 細胞を構成する成分		
	3	細菌とウイルス 酵素とその働き		細菌とウイルスの感染方の違い 酵素と補酵素		
	4	細胞分裂 有糸分裂		細胞周期と体細胞分裂		
	5	減数分裂		減数分裂のメカニズム		
	6	メンデルの法則		優性・分離・独立の法則		
	7	中間試験 視神経・聴覚神経		2週から6週までの試験 視神経・聴覚神経の伝導路		
	8	変異 再生医療		遺伝子変異と修復 遺伝子組み換え ES細胞・iPS細胞		
	9	抗体と血液型		抗体の種類 ABO血液型判定		
	10	筋紡錘 体温とその調節		反射による筋紡錘の作用 体温調節のメカニズム		
	11	発生学		受精から発生までの胎児の成長過程		
	12	ホメオスタシス 睡眠		正と負のフィードバック 睡眠の波形 レム睡眠		
	13	グループパワーポイント作成		主題を決めてどのパートをプレゼンするか決める		
	14	グループパワーポイント作成		題材を集めてパワーポイントを作成		
	15	グループパワーポイントプレゼン		グループごとにプレゼンを行う		
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・解剖学・生理学で学んだ内容を復習・確認しながら勉強を進めること。 ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	手話	指導担当者名	山中沙織・滝田真紀
実務経験	手話通訳指導者		ST実務: 無
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科1年
授業方法	講義:	演習:○	実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間 週時間数
			2時間
学習到達目標	①聴覚障害者とのコミュニケーション方法を学ぶ ②聴覚障害者との歴史や文化を学ぶ ③実際に手話を学び、聴覚障害者と会話をする ④手話の学習を通して「福祉の心(相手を思いやる心)」を学ぶ		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験、実技試験、出席状況、授業態度を総合し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	手話入門講座テキスト「手話を学ぼう」「ろう者との対話のために」		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	導入・手話講座①	・ビデオ鑑賞「私の大切な家族」を見て感想文を書く ・講義「聴覚障害者とのコミュニケーション方法」 ・第1講座「伝え合ってみましょう」
	2	手話②	・第2講座「名前を紹介しましょう」 ・指文字学習
	3	手話③	・第3講座「家族を紹介しましょう」
	4	手話④	・第4講座「数字を覚えましょう」
	5	手話⑤	・第5講座「趣味について話しましょう」 ・講義「聴覚障害者の趣味について」
	6	手話⑥	・第6講座「仕事について話しましょう」 ・講義「聴覚障害者の仕事について」
	7	手話⑦	・第7講座「住所を紹介しましょう」
	8	手話⑧	・第8講座「まとめ(自己紹介)」
	9	手話⑨	・第9講座「時制について話しましょう」
	10	手話⑩	・第10講座「会話してみよう①～旅行について～」
	11	手話⑪	・第11講座「会話してみよう②～医療について～」 ・講義「聴覚障害者の医療について」
	12	手話⑫	・第12講座「会話してみよう③～学校について～」 ・講義「聴覚支援学校について」
	13	手話⑬	・第13講座「会話してみよう④～職場について～」 ・講義「聴覚障害者の職場で困ることについて」
	14	手話⑭	・第14講座「会話してみよう⑤～災害について～」
	15	手話⑮	・第15講座「まとめ」「手話劇発表」
	16		
履修上の留意点			
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。			

授業計画(シラバス)

科目名	コミュニケーション論			指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○医療従事者として、また、言語聴覚士として自己成長のためのコミュニケーション力を身に付ける。 ○ケアコミュニケーション検定受験に向けてコミュニケーションの基礎を身に付ける。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験、課題提出状況を総合し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	配布資料、ケアコミュニケーション問題集				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	医療従事者を目指す	心身共に健康な医療従事者として必要なことを学ぶ		
	2	自分を知る	自己概念、自己肯定感について学ぶ		
	3	他者から見た自分	他者から見た自分を知り、自己理解を深める		
	4	自分の態度	自身の態度を振り返る		
	5	人の心理を理解する	表情や態度、言動から心の状態を理解する		
	6	対人コミュニケーション分析	3つの交流パターンについて理解する		
	7	ストローク(存在認知)	良好な対人Com.実戦に向け必要なストローク活用法		
	8	Com.の基本的知識	言語的・非言語的Com.について深める		
	9	観察する力	専門職としての「みる」力を理解する		
	10	傾聴	良き聞き手となるために必要なことを学ぶ		
	11	伝える	自身の伝え方の課題をみつける		
	12	自己主張	相手を傷つけない伝え方、相手も自分も大切にしたい自己主張とは		
	13	自己管理①	時間管理と健康管理を学ぶ		
	14	自己管理②	感情(特に怒り)のコントロールについて学ぶ		
	15	自己存在と自己実現	まとめとして自身の将来を具体的に描いてみる		
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	社会学			指導担当者名	齋藤 順子	
実務経験	歯科医師				ST実務:	無
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習目標	○医療をめぐる様々な現実を知り、問題点を見つけ出す。また、言語聴覚士として自身に足りない部分を理解する。「人間力」「感受性」を養う。					
評価方法	感想文提出、レポート提出、発表会への参加状況を加味して100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	配布プリント					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目			内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	社会学とは			歴史、授業の概要	
	2	医療社会学①			「ダウン症」の世界	
	3	医療社会学①			～たったひとつのたからもの～	
	4	医療社会学②			「若年性アルツハイマー」の世界	
	5	医療社会学②			～明日の記憶～	
	6	医療社会学③			「プロジェリア」の世界	
	7	医療社会学③			～アシュリーと生きて～	
	8	医療社会学④			「不妊・親子になれない親子」の世界	
	9	医療社会学④			～ブラックジャックによるしく～	
	10	医療社会学⑤			「神経難病病院」をめぐる問題	
	11	医療社会学⑤			～病院ラジオ①～	
	12	医療社会学⑥			「リハビリテーション病院」をめぐる問題	
	13	医療社会学⑥			～病院ラジオ②～	
	14	医療社会学⑦			「安楽死」をめぐる社会	
	15	医療社会学⑦			～彼女は安楽死を選んだ～	
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	プレゼンテーション学 I			指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	後期		対象学科学生		言語聴覚士科1年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	15時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○今後、機会が持たれる様々な発表会におけるマナー、資料作成の技術を身に付け、プレゼンテーション力を養う。				
評価方法 評価基準	作成資料、レポート提出、発表会への参加状況を加味して100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	指導担当者の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	プレゼンテーションとは		授業の目的、概要	
	2	発表のマナー		発表者の心構え、質問者の態度、心構えを学ぶ	
	3	スライド作成を学ぶ		見やすい、伝わりやすいスライドの作成法を学ぶ	
	4	スライド作成を学ぶ		見やすい、伝わりやすいスライドの作成法を学ぶ	
	5	資料作成		発表会用の資料、スライド作成	
	6	資料作成		発表会用の原稿作成	
	7	発表会、相互評価		発表会実施、学生間での相互評価	
	8	まとめ、フィードバック		教員よりフィードバック	
	9				
	10				
	11				
	12				
	13				
	14				
	15				
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	統計学			指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○統計の基本事項の理解とデータの処理方法を学習する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	平均値と分散		ガイダンス	
	2	正規分布		分布表の使い方	
	3	標準正規分布		標準正規分布と一般正規分布の違い	
	4	分散の計算式と意味		標準平均の分布	
	5	二項分布		順列と組合せ	
	6	二項分布		Excel使用	
	7	相関関係と共分散		散布図	
	8	回帰直線		Excelを使用	
	9	計算		二項分布の正規分布による計算	
	10	中間テスト			
	11	t分布		t分布について	
	12	t分布		表の利用と応用	
	13	x ² 分布について		x ² 分布について	
	14	まとめ1			
	15	まとめ2			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	情報処理			指導担当者名	古川 美恵子
実務経験	日本語文書処理技能検定1級				ST実務: 無
開講時期	通年		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:		演習:○		実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○Word ・正しいビジネス文書の作成(実務で活用できる) ・サーティファイWord文書処理技能認定試験3級合格 ○Excel ・表作成とグラフ作成、数式・関数の知識と理解、数式関数の正しい使い方 ・サーティファイExcel表計算処理技能認定試験3級合格 ○タッチタイピングの習得、ビジネス文書作成におけるルールの理解				
評価方法 評価基準	学習評価は、前期・後期に実施する実技試験結果、小テスト、提出課題、授業への取り組み状況や姿勢を加味して100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	クイックマスターWord2021(ウイネット)・文書処理技能認定試験3級問題集(サーティファイ) クイックマスターExcel2021(ウイネット)・表計算処理技能認定試験3級問題集(サーティファイ)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 通年 (前期)	1	タッチタイピングの練習		タッチタイピングの理解、タイピングソフトの活用	
	2	Wordの基本操作、文字入力		画面構成、名称等の理解	
	3	文書の編集		文書の書式設定、さまざまな編集機能の理解	
	4	様々な機能		メリハリのある文書作成の実践	
	5	ビジネス文書の成り立ち		ルールに則った形式の理解	
	6	新規文書作成		新規ビジネス文書の作成	
	7	表作成と編集①		罫線と文字入力の理解	
	8	表作成と編集②		効率のよい表作成の理解	
	9	図形の作成と編集		画像の挿入等の理解	
	10	文書処理技能認定試験3級問題集		文書作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	11	文書処理技能認定試験3級問題集		文書作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	12	文書処理技能認定試験3級問題集		文書作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	13	文書処理技能認定試験3級問題集		文書作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	14	文書処理技能認定試験3級問題集		文書作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	15	文書処理技能認定試験3級問題集		文書作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	情報処理			指導担当者名	古川 美恵子
実務経験	日本語文書処理技能検定1級				ST実務: 無
開講時期	通年		対象学科学年	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:	演習:○		実習:	実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○Word ・正しいビジネス文書の作成(実務で活用できる) ・サーティファイWord文書処理技能認定試験3級合格 ○Excel ・表作成とグラフ作成、数式・関数の知識と理解、数式関数の正しい使い方 ・サーティファイExcel表計算処理技能認定試験3級合格 ○タッチタイピングの習得、ビジネス文書作成におけるルールの理解				
評価方法 評価基準	学習評価は、前期・後期に実施する実技試験結果、小テスト、提出課題、授業への取り組み状況や姿勢を加味して100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	クイックマスターWord2021(ウイネット)・文書処理技能認定試験3級問題集(サーティファイ) クイックマスターExcel2021(ウイネット)・表計算処理技能認定試験3級問題集(サーティファイ)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 通年 (後期)	16	Word復習			
	17	Excelの基本操作		画面構成、名称等の理解	
	18	データの編集①		新規ブックの作成とデータ入力	
	19	データの編集②		数式の入力(相対参照と絶対参照の理解)	
	20	表の編集		セルの書式設定、罫線の設定の理解	
	21	グラフと図形の作成		表からグラフ作成、図形等の理解	
	22	関数①		統計、数学・三角、論理関数の理解①	
	23	関数②		統計、数学・三角、論理関数の理解②	
	24	データベース機能		データの並べ替え、抽出の理解	
	25	表計算処理技能検定試験3級問題集		表作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	26	表計算処理技能検定試験3級問題集		表作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	27	表計算処理技能検定試験3級問題集		表作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	28	表計算処理技能検定試験3級問題集		表作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	29	表計算処理技能検定試験3級問題集		表作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
	30	表計算処理技能検定試験3級問題集		表作成技能とビジネス実務への展開能力の実践	
31					
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	レクリエーション理論	指導担当者名	齋藤 由香
実務経験	音楽療法士		ST実務: 無
開講時期	前期	対象学科学生	言語聴覚士科
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間 週時間数 2時間
学習到達目標	○色々な音を五感で感じる。 ○場に合った音楽の使い方を学ぶ。 ○音楽を使ってコミュニケーションの輪を広げる。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験と授業内の実技を総合して100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	担当教員作成の資料による		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	音楽療法について 音と心と体について(音を感じて色で表現)	画用紙・クレヨン
	2	音の仕組み	音楽の歴史・癒しの音楽について。ベル
	3	音楽を体で表現する	手話・ダンス
	4	子供に対する音楽療法①	子供の障害について
	5	子供に対する音楽療法②	子供の曲について
	6	音を作る	楽器を作る
	7	オノマトペ	言語表現
	8	音による表現①	言葉と音を使い表現
	9	音による表現②	発表
	10	高齢者に対する音楽療法①	症例など
	11	高齢者に対する音楽療法②	時代背景・年代別の歌
	12	和の楽器で表現①	日本の民謡や音の仕組みについて
	13	和の楽器で表現②	和太鼓のリズム練習
	14	和の楽器で表現③	和太鼓・発表
	15	まとめ	全体のまとめ
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> ・季節の歌、年代ごとの色々な曲を覚える ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 			

授業計画(シラバス)

科目名	栄養学			指導担当者名	齋藤 順子
実務経験	歯科医師				ST実務: 無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習目標	○言語聴覚士として必要な栄養の基礎知識を学ぶ。 ○栄養の代謝・消化・吸収の機能を学ぶ。 ○嚥下障害と栄養の関連を学び、嚥下食を考える。				
評価方法	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	栄養の概念		栄養の基礎、言語聴覚士との関わり	
	2	栄養の生理①		代謝・消化と吸収	
	3	栄養の生理②		生体の構成成分と栄養素	
	4	栄養の生理③		クエン酸回路～空腹期の栄養、エネルギー代謝	
	5	栄養とバランス		ライフステージに合わせた栄養を考える	
	6	健康とバランス		ライフステージに合わせた栄養を考える	
	7	口・食道の働き		嚥下の各ステージに合わせた解剖・生理を学ぶ	
	8	消化器系の働き		胃から腸までの消化・吸収作用を学ぶ	
	9	炭水化物の栄養		糖質の体内代謝、エネルギー源としての作用	
	10	蛋白質の栄養		アミノ酸の体内代謝、エネルギー源としての作用	
	11	脂質の栄養		脂質の体内代謝、エネルギー源としての作用	
	12	ビタミンの栄養		種類と働き、欠乏症を学ぶ	
	13	栄養状態の評価・判定		評価法と目的・判定・改善法を学ぶ	
	14	嚥下障害と栄養		症例に合った嚥下食を考える	
	15	嚥下障害と栄養		症例に合った嚥下食を考える(発表)	
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	理学療法学			指導担当者名	横谷 貴之
実務経験	理学療法士				ST実務: 無
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習:
単位数	1単位	総時間数	15時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○作業療法の理論と実際を学ぶ。 ○高齢化社会の中、地域リハビリテーションや地域包括ケアシステムにおいて求められるリハビリ専門職の役割とチームアプローチについて理解する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、ペーパーテストによる定期試験にて行うが、授業への取り組み姿勢・発言も考慮して100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	プリント教材、ビデオ教材				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	理学療法概論(1)		理学療法の理念や理論について理解する。	
	2	理学療法概論(2)		医学的、教育的、心理的、職業的、社会的等の様々なリハビリテーションを通して理学療法を理解する。	
	3	理学療法概論(3)		理学療法士の業務や職域等について理解する。	
	4	地域リハビリテーションにおける理学療法		地域リハビリテーションの定義を踏まえ、地域包括ケアシステムや介護予防事業等における理学療法士やリハビリ専門職の役割を理解する。介護予防事業の内容を体験する。	
	5	チームアプローチと多職種連携		チームアプローチと多職種連携において、求められるリハビリ専門職の役割について理解する。	
	6	脳卒中リハビリテーションにおける理学療法(1)		脳卒中リハビリテーションを通して、急性期、回復期、維持期における理学療法を理解する。	
	7	脳卒中リハビリテーションにおける理学療法(2)		脳卒中リハビリテーションを通して、理学療法士、言語聴覚士、作業療法士の連携について理解する。	
	8	まとめ STとの関わりを考える			
	9				
	10				
	11				
	12				
	13				
	14				
	15				
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	作業療法学	指導担当者名	岡本 宏二
実務経験	作業療法士		ST実務: 無
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	15時間 週時間数 2時間
学習到達目標	(OT分野) ・作業療法の理論と実際 ・地域リハビリテーションの展開 ・ボランティア等包括支援を学ぶ (PT分野) ①リハビリテーションの理念を理解した上で、医療、職業、教育等の様々なリハビリテーションの概念と理学療法を理解する。 ②脳卒中のリハビリテーションを通して、リハビリテーション医療の流れを理解する。 ③地域包括ケアシステムの構築で求められるリハビリテーション専門職の役割と多職種連携について理解する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験、レポート内容を総合し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	プリント教材、ビデオ教材		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	作業療法概論(1)	作業療法の歴史
	2	作業療法概論(2)	作業療法の根幹
	3	作業療法概論(3)	運動-感覚系の視点
	4	高次脳機能に関する作業療法	自閉症・認知症に対する実際例を通して学ぶ
	5	病院施設の作業療法・地域の作業療法	地域包括ケア等における作業療法の実際
	6	作業≒生活の視点から	ADL・IADL・QOLについて
	7	発達障害と作業療法	小児分野での活動
	8	言語聴覚士との連携	作業療法士が言語聴覚士に期待すること
	9		
	10		
	11		
	12		
	13		
	14		
	15		
	16		
履修上の留意点			
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。			

授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚療法の基盤 I			指導担当者名	齋藤 順子・寺内 義貴
実務経験	齋藤：歯科医師 寺内：医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務：	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義：○		演習：		実習：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習目標	○課題解決型学習(PBL)とし、1年で学んだ知識を活用したグループワークの実践により医療現場、言語聴覚士をより深く理解する。				
評価方法	学習評価は、定期試験、課題やレポートの内容を総合し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	ガイダンス		授業の内容、進め方の説明	
	2	病院見学の実施		病院見学に向けての準備	
	3	病院見学の実施		言語聴覚士の仕事を1日見学する	
	4	見学を終えて		実際の現場に触れた体験談発表	
	5	解剖学・生理学・病理学復習		基礎知識の復習	
	6	解剖学・生理学・病理学復習		基礎知識の復習	
	7	神経系・呼吸系復習		基礎知識の復習	
	8	小児領域復習		基礎知識の復習	
	9	症例に基づく基礎的知識の理解①		STが関与する症例の理解(症例1)	
	10	症例に基づく基礎的知識の理解①		STが関与する症例の理解(症例1)	
	11	症例に基づく基礎的知識の理解②		STが関与する症例の理解(症例2)	
	12	症例に基づく基礎的知識の理解②		STが関与する症例の理解(症例2)	
	13	症例に基づく基礎的知識の理解③		STが関与する症例の理解(症例3)	
	14	症例に基づく基礎的知識の理解③		STが関与する症例の理解(症例3)	
	15	まとめ、講評			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークを基盤とした授業であるため、事前予習を行うこと。 ・グループ内では積極的な意見交換を心掛けること。 ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	医学総論			指導担当者名	齋藤 順子
実務経験	歯科医師				ST実務: 無
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	日本の医療現場の現状を見極め、現代医療の本質を認識する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	医学とは？ 医学の歴史		概論	
	2	医療に従事する人々		職種、チーム医療	
	3	医療体制		医療施設	
	4	リハビリテーション		障害者施設	
	5	高齢者ケア		少子高齢化と社会と医療	
	6	今日の病院事情		ホスピス、終末期ケア	
	7	今日の病院事情		救急医療など	
	8	近代医療の発達		感染症・医療サービス等	
	9	今日の病院事情		インフォームドコンセント	
	10	今日の病院事情		個人情報・守秘義務	
	11	健康とは①		生活習慣病	
	12	健康とは②		QOL(生命の質・生活の質)	
	13	健康とは③		ICF(交際生活機能分類)とICIDH(WHO国際障害分類)	
	14	健康とは④		ICF(交際生活機能分類) ケースを使い考える	
	15	まとめ		まとめ	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	解剖学			指導担当者名	室井 由美子	
実務経験	アメリカナショナル大学解剖生理学元講師				ST実務:	無
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○解剖学的構造の位置を把握し、その構造をカラーリング(塗り絵)で理解を深め最終的に人体の構造を全体として理解できるようにする。					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験結果、小テスト、カラーリング課題の結果を加味し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	系統看護学講座 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能① (医学書院)					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	人体の階層性と人体の素材としての細胞		原子～個体までの構造 細胞(細胞小器官・細胞膜・核)		
	2	核酸 分化した細胞が作る組織		DNAとRNAの違い 上皮・支持・筋・神経組織		
	3	血液の組成と機能		赤血球 白血球 血小板 血漿 血清		
	4	体液と浸透圧		細胞内液・外液 浸透圧		
	5	栄養の消化と吸収		口腔～肛門までの各部位の名前 (カラーリング宿題)		
	6	膵臓・肝臓・胆のうの構造		膵臓・肝臓・胆のうの位置関係と血管分布		
	7	呼吸器系		口腔～気管・気管支・肺の構造 (カラーリング宿題)		
	8	1週から7週までの復習		小試験Iの為のグループワーク		
	9	小試験I 心臓の構造と動き		小試験I 心臓各部位の名前と心臓に出入する動静脈血管の名前を知る (カラーリング課題)		
	10	血液の循環とその調節		主要動脈・静脈・リンパ系の構造の違いと名前を知る (カラーリング課題)□		
	11	筋・骨格系		主要骨名・筋肉名を知る		
	12	内分泌系		内分泌腺とホルモン		
	13	腎臓・酸塩基平衡 生殖系		腎臓・尿管・尿道 男女生殖器構造		
	14	8週から13週までの復習		小試験IIの為のグループワーク		
	15	小試験II 定期試験復習		小試験II 定期試験の為のグループワーク		
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	生理学	指導担当者名	室井 由美子
実務経験	アメリカナショナル大学解剖生理学元講師		ST実務: 無
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科 1年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間 週時間数 2時間
学習到達目標	○呼吸のメカニズムとそれに伴ってのガス交換と筋の動きを理解し、後半は神経系、特に中枢神経と末梢神経の違いや末梢神経の体性神経・自律神経・脳神経の作用を理解する。刺激がどのように脳に伝達され、脳からどのように指令がするのかを理解する。また、栄養の身体生理との関係性を理解する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験、小テストの結果を加味し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	系統看護学講座 専門基礎分野 解剖生理学 人体の構造と機能① (医学書院)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	細胞の構造と作用	細胞小器官の作用 細胞膜のたんぱく質の機能 輸送隊・受容体・酵素
	2	たんぱく質合成	たんぱく質合成 mRNA rRNA tRNA
	3	エネルギーの変換とATP生産	ATPの構造 解糖系 クエン酸回路 電子伝達系
	4	栄養の消化と吸収	嚥下の過程 3大栄養素の吸収メカニズムとそれを助ける酵素
	5	膵臓・肝臓・胆嚢の機能	胆汁産生と循環・膵液と内分泌の作用・肝臓の作用
	6	血液の作用	赤血球 白血球 血小板の作用
	7	呼吸器系	呼吸気量・ガス交換・呼吸筋
	8	1週から7週までの復習	小試験Iの為のグループワーク
	9	小試験I 活動電位 神経系の構造と機能①	小試験I ニューロンの構造(有髄神経・無髄神経) 静止膜電位 活動電位 (脱分極 再分極)
	10	神経系の構造と機能①	中枢神経系 (脊髄・脳幹・間脳・小脳・大脳の機能)
	11	神経系の構造と機能②	末梢神経系 (体性神経 自律神経 脳神経)
	12	神経系の構造と機能③	自律神経
	13	神経系の構造と機能④	脳神経 I～XII
	14	筋収縮 9週から14週までの復習	筋収縮のメカニズム 小試験IIの為のグループワーク
	15	小試験II 特殊感覚	小試験II 視覚・聴覚・平衡覚
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 			

授業計画(シラバス)

科目名	病理学			指導担当者名	齋藤 順子
実務経験	歯科医師			ST実務:	無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○疾病により構造がどのように変化し悪化あるいは回復の過程を経るかを学ぶ。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	病気の原因 細胞の損傷とその原因		外因と内因 細胞の老化と活性酸素	
	2	細胞・組織の損傷		萎縮・肥大・化成・壊死・アポトーシス・化成 細胞の死	
	3	組織の修復と創傷治療		再生 肉芽組織と瘢痕組織 一次治癒と二次治癒	
	4	循環障害I		循環系の概要 浮腫 浸出液と濾出液 充血とうっ血 出血 血栓症	
	5	循環障害II		塞栓症 虚血と梗塞 ショック 高血圧症	
	6	先天異常と遺伝子異常 再生医療		常染色体・性染色体異常 常染色体優性・劣性遺伝 再生医療	
	7	炎症 感染症I		炎症の過程と5徴候 病原体の種類と感染	
	8	感染症II		細菌とウイルスの感染メカニズム	
	9	血圧		高血圧の分類 レニン・アンギオテンシン・アルドステロン系 交感神経受容体	
	10	免疫と免疫不全		非特異的・特異的免疫 細胞性免疫と液性免疫	
	11	アレルギー		I～V型アレルギー	
	12	代謝障害I		栄養障害:糖・タンパク質・脂質代謝障害	
	13	代謝障害II		栄養障害:ビルルビン代謝	
	14	腫瘍		良性・悪性腫瘍	
	15	まとめ		定期試験総復習	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床歯科医学・口腔外科学				指導担当者名	齋藤 順子	
実務経験	歯科医師					ST実務:	無
開講時期	前期			対象学科学年		言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:		実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間		
学習到達目標	○顔面・口腔の解剖・生理・病態を理解し、言語聴覚士に必要な歯科の知識を身に付ける。						
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)						
使用教材	言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学 (医歯薬出版)						
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。						
学期	ターム	項目			内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	歯の図と名称			ガイダンス・自身の口腔・歯の理解を深める		
	2	記号・方向用語			記号・方向用語		
	3	歯と歯列の発育			正常発育について		
	4	唾液腺・顔面の解剖と生理			顔面の名称、唾液腺の名称と性状		
	5	口腔の解剖と生理			口腔軟組織の携帯と働き		
	6	う蝕①			原因、病態・種類他		
	7	う蝕②			小児う蝕		
	8	歯周疾患①			原因・病態他		
	9	歯周疾患②			予防法		
	10	治療			う蝕・歯周疾患の治療		
	11	鼻咽腔閉鎖機能①			鼻咽腔の形態、閉鎖機能とは？		
	12	鼻咽腔閉鎖機能②			閉鎖不全でおこる病態		
	13	顎間接に關与する疾患			顎間接の解剖、顎関節症、強直症、脱臼		
	14	補綴的発音補助装置			スピーチエイド・パラタルリフト他の適応		
	15	顔面・口腔と脳神経			顔面、口腔に關与する脳神経		
	16						
履修上の留意点							
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 							

授業計画(シラバス)

科目名	呼吸・発声・発語系の構造・機能・病態			指導担当者名	吾妻 真帆	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○呼吸・発声・発語に関わる器官の構造を理解した上で、呼吸の生理・発声の生理・発語の生理を理解する。また、呼吸器系に関わる疾患を学び、病態を把握する。					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	ディサースリアの基礎と臨床 (インテルナ出版)					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	発声・構音器官の構造・機能		発声と構音・肺・気管・気管支		
	2	発声・構音器官の構造・機能		胸郭と横隔膜		
	3	発声・構音器官の構造・機能		呼吸筋		
	4	発声・構音器官の構造・機能		喉頭のしくみ		
	5	発声・構音器官の構造・機能		喉頭のしくみ		
	6	発声・構音器官の構造・機能		付属管腔		
	7	呼吸調節		呼吸運動		
	8	呼吸調節		肺容量・スパイログラム		
	9	呼吸調節		肺容量・スパイログラム		
	10	呼吸調節		呼気調節		
	11	呼吸調節		発声時の喉頭調節		
	12	付属管腔		下顎・舌の構造とはたらき		
	13	付属管腔		鼻咽腔閉鎖機能と口蓋		
	14	呼吸器の疾患		閉塞性・拘束性換気障害		
	15	呼吸器の疾患		音声障害 他		
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	聴覚系の構造・機能・病態			指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	前期		対象学科学年	言語聴覚士科1年	
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○耳の構造・機能および疾患・障害について理解する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	Success第2版 耳鼻咽喉科(金原出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	ガイダンス	授業の概要、外耳・中耳・内耳の全体像		
	2	聴器の構造①	外耳の構造		
	3	聴器の構造②	中耳の構造		
	4	聴器の構造③	中耳の構造		
	5	聴器の構造④	内耳の構造		
	6	聴器の構造⑤	内耳の構造		
	7	聴器の機能①	伝音機構：外耳の機能		
	8	聴器の機能②	伝音機構：中耳の機能		
	9	聴器の機能③	伝音機構：中耳の機能		
	10	聴器の機能④	感音機構：内耳の機能		
	11	聴器の機能⑤	感音機構：内耳の機能		
	12	聴器の病態①	難聴の原因		
	13	聴器の病態②	伝音難聴と感音難聴		
	14	聴器の病態③	後迷路性難聴		
	15	聴器の病態④	遺伝性難聴		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	神経系の構造・機能・病態			指導担当者名	齋藤 順子	
実務経験	歯科医師				ST実務:	無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○神経の構造と働き・代表的な疾患を理解する。					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	病気がみえる Vol7(MEDIC MEDIA)					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	神経系の分類		中枢神経と末梢神経		
	2	脳の構造とはたらき①		脳の解剖、灰白質と白質、線維、髄膜、他		
	3	脳の構造とはたらき②		大脳皮質、大脳基底核 他		
	4	脳の構造とはたらき③		グリア細胞、伝導と伝達		
	5	運動の伝達路①		分類、皮質脊髄路		
	6	運動の伝達路②		皮質脊髄路		
	7	運動の伝達路③		皮質延髄路		
	8	運動の伝達路④		皮質延髄路		
	9	運動の伝達路⑤		上位運動ニューロン・下位運動ニューロン		
	10	運動の異常①		運動麻痺		
	11	運動の異常②		錐体路障害		
	12	運動の異常③		運動の調節		
	13	脳神経①		脳神経の機能		
	14	脳神経②		脳神経の機能		
	15	脳神経③		脳神経の機能		
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	認知心理学			指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○認知心理学に関する基礎的知識を習得し、人間の感情・記憶・思考などについて実証的で総合的な理解を目標とする。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚士のための心理学 第2版 (医歯薬出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	認知心理学		認知心理学とは	
	2	感覚・知覚		感覚の分化と統合	
	3	視知覚		視知覚と色彩感覚 明順応・暗順応	
	4	視知覚		奥行き知覚	
	5	記憶①		記憶の過程 短期記憶・長期記憶	
	6	記憶②		記憶術 記憶の発達	
	7	忘却		エビングハウスの忘却曲線	
	8	学習		条件づけ・技能・社会学習	
	9	知能		知能の測定 知能因子	
	10	思考①		問題解決と認知発達	
	11	思考②		洞察 認知発達	
	12	推論		習慣的構え 機能の固着	
	13	精神物理学的測定法		調整法・極限法・恒常法 名義尺度など	
	14	尺度・言語		非言語的コミュニケーション	
	15	まとめ			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	学習心理学			指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○心理学の基礎を理解し、学習心理の領域で明らかにされてきた様々な学習の仕組みを正しく理解する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚士のための心理学 第2版 (医歯薬出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	心理学のプロフィール		ガイダンス	
	2	単純な学習①		順化と鋭敏化	
	3	単純な学習②		初期学習	
	4	古典的条件付け①		パブロフの研究と古典的条件付け	
	5	古典的条件付け②		古典的条件付けにおける般化と分化	
	6	古典的条件付け③		古典的条件付けの枠組みと評価	
	7	オペラント条件付け①		ソーンダイクの研究	
	8	オペラント条件付け②		オペラント条件付けの枠組みと評価	
	9	オペラント条件付け③		オペラント条件付けの枠組みと評価	
	10	条件付けの応用		条件付けの応用	
	11	記憶の総論①		記憶の過程	
	12	記憶の総論②		記憶の過程構造	
	13	記憶の各論①		感覚記憶と短期記憶	
	14	記憶の各論②		長期記憶	
	15	まとめ		まとめ	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	生涯発達心理学			指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	通年		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○「発達是一生涯続くもの」という近年の生涯発達心理学の考え方をもとに様々な研究や理論を通して小児から老年までの人の発達を学ぶことで医療従事者として必要な患者様理解ならびに自己理解を深める。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験結果、授業受講態度、関心意欲、中間レポート課題の提出状況を加味して100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	発達心理学15講 第3版 (北大路書房)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 通年 (前期)	1	人間発達とは		成長と発達の違い、発達段階と発達課題	
	2	発達の要因		遺伝要因説、環境要因説	
	3	生涯発達の研究方法		観察法、面接法、実験法、ケーススタディ	
	4	胎児期		出生前発達と出生	
	5	新生児期から乳児期		新生児・乳児期特有の発達と特徴	
	6	幼児期までの各種研究①		情緒の発達、視覚的断崖	
	7	幼児期までの各種研究②		愛着、アカゲザルの実験、新奇場面法	
	8	幼児期前期①		身体の発達と社会性の発達	
	9	幼児期前期②		言語発達と認知能力の発達	
	10	幼児期後期①		社会性の発達と知能の発達	
	11	幼児期後期②		人と能力の発達と遊びの変化	
	12	幼児期の問題と支援		発達の遅れと支援	
	13	児童期①		小学校低学年の特徴と課題	
	14	児童期②		小学校中学年の特徴と課題	
	15	児童期③		小学校高学年の特徴と課題	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	生涯発達心理学			指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	公認心理士				ST実務: 有
開講時期	通年		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○「発達是一生涯続くもの」という近年の生涯発達心理学の考え方をもとに様々な研究や理論を通して小児から老年までの人の発達を学ぶことで医療従事者として必要な患者様理解ならびに自己理解を深める。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験結果、授業受講態度、関心意欲、中間レポート課題の提出状況を加味して100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	発達心理学15講 第3版 (北大路書房)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 通年 (後期)	16	発達障害		児童期における発達障害の特徴と支援	
	17	青年期①		青年期の発達の特徴	
	18	青年期②		モラトリアム、心理的離乳、二次性徴	
	19	青年期③		昨今の青年期の問題	
	20	中年期		中年期危機を中心に	
	21	老年期①		高齢化社会と死の受容	
	22	老年期②		サクセスフルエイジングと喪失	
	23	知能の発達		知能の研究と知能検査	
	24	知能検査①		ビネー式とウェクスラー式	
	25	知能検査②		各種検査用具紹介	
	26	知能検査③		検査の基礎練習	
	27	エリクソンのライフサイクル論		各期の課題と特徴	
	28	愛着(アタッチメント)		ボウルビィ、ハーロウ、エインズワース	
	29	ピアジェの諸理論		シエマ、同化、調節、認知発達段階	
	30	まとめ		まとめ	
31					
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	音声学			指導担当者名	渡邊 智恵
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○日本語の音声を聴取しIPAを用いて記述できる ○構音障害の評価、訓練に必要な音声学の基本概念とスキルを身につける ○発話における超分節的要素について説明できる				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	たのしい音声学 (くろしお出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	オリエンテーション		音声学とは	
	2	発声発語器官		発声発語器官の機能と構造	
	3	単音・母音と子音		母音と子音	
	4	子音(1)		破裂音について	
	5	子音(2)		摩擦音について	
	6	子音(3)		破擦音、鼻音について	
	7	子音(4)		はじき音、接近音について	
	8	特殊音		撥音、促音、長音	
	9	様々な音声現象		母音の無声化、硬口蓋化等	
	10	音素		異音、最小対	
	11	音節とモーラ		音節とモーラ	
	12	超分節的特徴(1)		アクセント	
	13	超分節的特徴(2)		アクセント、イントネーション	
	14	超分節的特徴(3)		ポーズ、プロミネンス	
	15	まとめ		まとめ、国家試験過去問題	
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	言語発達学			指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○言語発達療法の基礎となることばの発達について、乳児期から学童期にわたる正常なことばの発達過程について理解する				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行う。 定期試験は100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	Crosslink言語聴覚療法学テキスト 言語学・言語発達学 (メジカルビュー社)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	ことばの発達		言語聴覚士にとっての言葉の発達・言葉の側面	
	2	ことばの発達		前言語期(叫喚発声・ボーカープレイ・喃語)	
	3	ことばの発達段階		前言語期(カテゴリー知覚・指差し)	
	4	ことばの発達段階		前言語期(共鳴動作・情動伝染・二項関係)	
	5	ことばの発達段階		前言語期(共同注視・三項関係)	
	6	ことばの発達段階		前言語期のまとめ	
	7	ことばの発達段階		1～2歳児の言語 (初語の特徴・過大汎用と爆発期)	
	8	ことばの発達段階		1～2歳児の言語 (マークマンの制約・社会的語用論)	
	9	ことばの発達段階		1～2歳児の言語(CDS・一語発話・2語文)	
	10	ことばの発達段階		幼児期の言語(語彙の拡大・構文の発達)	
	11	ことばの発達段階		幼児期の言語(音韻意識・談話能力)	
	12	ことばの発達段階		学童期の言語発達 (読み書き能力、学習言語の発達)	
	13	ことばの発達段階		学童期の言語発達(メタ言語能の発達)	
	14	発達理論		学習説・生得説・認知説	
	15	まとめ		国家試験問題を使い、復習	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚障害学総論			指導担当者名	長谷川賢一
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○言語聴覚士について全体的に概説した内容が理解できる。 ○言語聴覚士の仕事について理解できる。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験結果に小テストの結果を加味して100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 言語聴覚障害概論 第2版 (医学書院)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	言語聴覚障害とは		コミュニケーションとその障害、言語聴覚障害の特徴	
	2	言語聴覚士とは①		言語聴覚士法、言語聴覚士が勤務する場所	
	3	言語聴覚士とは②		言語聴覚士の役割について	
	4	言語とコミュニケーション		言語・コミュニケーションとは？ 言葉の鎖	
	5	言語と脳		言葉の鎖(小テスト)、脳の解剖、言語障害について	
	6	失語症について		脳回・脳溝(小テスト)、失語症のタイプ・症状、話声試験	
	7	言語発達障害について		言語発達障害の原因・種類・症状、DSM-5、ICD-11	
	8	高次脳機能障害について		高次脳機能障害の定義、原因、種類、症状	
	9	音声障害について		音声障害の定義、原因、種類、症状	
	10	構音障害について①		機能的構音障害の定義、機能的構音障害、音声サンプル試験	
	11	構音障害について②		器質性、運動障害性構音障害、音声サンプル試験	
	12	吃音について		吃音の原因、中核症状、随伴症状	
	13	摂食嚥下障害について		摂食嚥下障害の原因、症状、摂食場面観察ポイント	
	14	聴覚障害について		聴覚障害の種類、症状、音の聴こえ方、聴覚障害者疑似体験	
	15	まとめ			
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	失語症学 I			指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○失語症の定義、原因、病態、研究の歴史について理解できる。 ○失語症のタイプ分類と特色について理解できる。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験と授業で行う小試験を総合して100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学 第3版 (医学書院)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	失語症について		失語症の定義・概要(事例、映像使用)	
	2	失語症の原因		失語症の原因について	
	3	脳と言語野		脳構造・ブロードマンの脳地図 傍シルヴィウス言語領域	
	4	言語に関する領域、失語症状		脳部位、神経ネットワーク	
	5	発話の障害		流暢性の障害、喚語・統語障害の特徴	
	6	聴覚的理解・復唱の障害		聴覚的理解・復唱の障害の特徴	
	7	読字の障害		読字・音読の障害の特徴	
	8	書字・計算の障害		自発書字・書取の障害の特徴、数・計算の障害の特徴	
	9	失語症の近縁症状・随伴症状		失語症の近縁症状 神経学的症状・失行などの随伴症状の特徴	
	10	純粹型について		純粹語聾、純粹語啞、純粹失読、 純粹失書、失読失書の特徴	
	11	古典的タイプ①		ブローカ失語、ウェルニッケ失語、 伝導失語、健忘失語の特徴	
	12	古典的タイプ②		超皮質性運動失語、超皮質性感覚失語、 超皮質性混合失語、全失語の特徴	
	13	その他の失語症の特徴について		交叉性失語、皮質下性失語、 原発性進行性失語、小児失語の特徴	
	14	失語症タイプ確認問題		失語症のタイプについての確認問題の実施	
	15	まとめ 総確認問題		まとめ、総確認の問題の実施	
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害学 I			指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○		演習:		実習:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○言語発達障害を引き起こす疾患・原因等の大枠を理解する				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行い100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚士のための言語発達障害学 (医歯薬出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	発達障害とは①		発達障害とは DSM-IV-TRについて	
	2	発達障害とは②		発達障害に気付かれる時期 軽度発達障害について	
	3	知的障害とは①		知的活動について 知的障害について	
	4	知的障害とは②		ダウン症について IQについて	
	5	知的障害とは③		ダウン症のめざめ	
	6	広汎性発達障害とは①		症例、異常感覚について	
	7	広汎性発達障害とは②		DSM-IV-TR 各疾患について	
	8	広汎性発達障害とは③		DSM-IV-TR 各疾患について	
	9	学習障害とは①		学習障害について	
	10	学習障害とは②		読み書き障害について	
	11	特異的言語発達遅滞とは①		特異的言語発達遅滞について	
	12	特異的言語発達遅滞とは②		特異的言語発達遅滞について	
	13	注意欠陥多動性障害とは		注意欠陥多動性障害のタイプについて	
	14	脳性麻痺、重複障害とは		脳性麻痺、重複障害について	
	15	まとめ			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	機能性構音障害学			指導担当者名	渡邊 智恵	
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○機能性構音障害の定義と概要を把握する。 ○構音と表記方法について学ぶ。 ○構音障害の評価・治療の内容と流れを理解する。					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行い100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	言語聴覚療法シリーズ7 改訂 機能性構音障害 (建帛社)					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	構音障害、構音の発達		構音障害の種類と構音の発達について		
	2	構音障害とは		IPA、構音の誤り方		
	3	音声表記		50音表		
	4	音声表記		弁別素性、音表、単語		
	5	異常構音		種類・概要		
	6	検査①		構音検査以外の検査		
	7	検査②		構音検査概要		
	8	検査③		構音検査(単語検査・書き取り)		
	9	検査④		構音検査(ビデオ起こし)		
	10	復習		失語と構音障害、種類、母音・子音の産生		
	11	訓練①		語音聞き取り訓練、音の産生訓練		
	12	訓練②		音の産生訓練		
	13	訓練③		訓練までの流れ(訓練適応・目的等)		
	14	国試問題		国試問題に挑戦		
	15	解答・解説		グループワーク(解答・解説)		
	16					
履修上の留意点						
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。						

授業計画(シラバス)

科目名	運動障害性構音障害学 I			指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○ディサースリアの概要・運動障害・発話特徴を理解する。 ○検査方法の手順を理解し、実施できる。 ○検査結果の解釈、問題点の抽出、訓練プログラムの立案ができる。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行い100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	ディサースリア臨床標準テキスト (医歯薬出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	概要		ディサースリアの定義、失語・発話失行との違い	
	2	タイプ分類概要		特徴的な運動障害 発話特徴の名称と意味	
	3	運動系とその障害		錐体路・下位ニューロン・錐体外路	
	4	運動系とその障害		錐体路・下位ニューロン・錐体外路	
	5	タイプ分類①		痙性ディサースリア・UUMNディサースリア	
	6	タイプ分類②		弛緩性ディサースリア	
	7	タイプ分類③		失調性ディサースリア	
	8	タイプ分類④		運動低下性ディサースリア	
	9	タイプ分類⑤		運動過多性ディサースリア	
	10	タイプ分類⑥		混合性ディサースリア	
	11	評価		評価の流れ	
	12	評価		評価の流れ	
	13	まとめ①		国試問題、解説	
	14	まとめ②		国試問題、解説	
	15	まとめ③		国試問題、解説	
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	吃音・流暢性障害学			指導担当者名	渡邊 智恵	
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○吃音・流暢性障害の基礎知識・検査・訓練について学ぶ					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にレポート課題の内容を加味して100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	言語聴覚療法 臨床マニュアル (共同医書出版)					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	吃音について		吃音者が抱える問題		
	2	吃音について		DSM-IV-TR、ICD-10定義 吃音についての知見		
	3	吃音症状		身体症状を含む吃音症状、進展段階		
	4	非流暢性		吃音以外の非流暢性、発達性・獲得性吃音		
	5	吃音と臨床の流れ		小児と成人の臨床のポイント		
	6	情報収集①		内容・聴取の仕方		
	7	情報収集②		幼児・学童・成人の情報収集		
	8	発話特徴		吃音頻度・非流暢性頻度・発話速度		
	9	検査		課題検査について		
	10	環境調整		幼児期の特徴、環境調整		
	11	症例検討		環境調整の例		
	12	訓練①		遊戯療法について		
	13	訓練②		流暢促進訓練・吃音軽減訓練		
	14	訓練③		DAF		
	15	まとめ				
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	摂食・嚥下障害学 I			指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○摂食嚥下時に行われている運動を理解する。 ○摂食嚥下障害の障害像、およびそれに起因する困難を理解する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行い100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚士のための嚥下障害 (医歯薬出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	摂食嚥下とは		食べるということ	
	2	摂食嚥下障害とは		摂食嚥下障害の概要	
	3	摂食嚥下にかかわる器官①		口腔	
	4	摂食嚥下にかかわる器官②		鼻腔・咽頭	
	5	摂食嚥下にかかわる器官③		喉頭・食道	
	6	摂食嚥下にかかわる筋		筋とその働きおよび支配神経	
	7	嚥下モデル①		生理モデル・臨床モデル	
	8	嚥下モデル②		先行期・準備期・口腔期	
	9	嚥下モデル③		咽頭期・食道期	
	10	発達と摂食嚥下障害		嚥下運動の獲得	
	11	加齢と摂食嚥下障害		加齢に伴う生理的变化	
	12	誤嚥		誤嚥の概要	
	13	誤嚥の分類①		ログマンの分類	
	14	誤嚥の分類②		その他の分類	
	15	まとめ			
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	聴覚障害学総論			指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科1年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○聴覚障害の種類、聴覚教育(療育)、聴覚検査を理解するとともに、聴覚障害者を取り巻く環境を理解する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行い100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版 (医学書院)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	聴覚系の構造・機能 復習		耳の構造・機能・病態の復習	
	2	難聴の種類		伝音難聴、感音難聴と疾患	
	3	難聴の種類		内耳性難聴、後迷路性難聴と疾患	
	4	小児聴覚障害		前言語期発症の難聴、難聴児を取り巻く環境	
	5	成人聴覚障害		後言語期発症の難聴、加齢性難聴、難聴者を取り巻く環境	
	6	視覚聴覚二重障害		視覚聴覚二重障害の特徴	
	7	聴覚器、平衡器の発生		耳の発生と先天性難聴	
	8	聴覚検査		聴覚伝導路	
	9	聴覚検査		純音聴覚検査とオーディオグラムの特徴	
	10	聴覚検査		語音聴力検査と語音聴力図	
	11	聴覚検査		小児聴力検査の種類と適応年齢	
	12	平衡機能検査		平衡機能検査の意義	
	13	平衡機能検査		平衡機能検査の実際	
	14	聴覚教育		聴覚障害児(者)の年齢に応じたサポート	
	15	補聴器・人工内耳		補聴器・人工内耳の適応と実際	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	カウンセリング論	指導担当者名	佐藤 明宏
実務経験	臨床心理士、公認心理師		ST実務: 無
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間 週時間数 2時間
学習到達目標	○カウンセリングの基礎知識、理論や技法を身に付けることにより、今後起き得る悩みや不安、困難な状況に対し、解決の手がかりを見つけ出す力を身に付ける。また、カウンセリングの基礎技能を理解し、「聞く技能」を身に付ける。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	言語聴覚士テキスト第3版 (医歯薬出版)、配布プリント		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業 計画 前期	1	カウンセリングとは	概要、歴史等
	2	カウンセリング理論の概要	カウンセリング理論の概要を理解する
	3	カウンセリング理論①	心の働きを理解する
	4	カウンセリング理論②	心の働きを理解する
	5	カウンセリング理論③	面接実施の心構え
	6	カウンセリング理論④	面接実施の心構え
	7	実践事例①	事例紹介、グループワーク
	8	実践事例②	事例紹介、グループワーク
	9	カウンセリング技法①	受容・共感・傾聴を理解する
	10	カウンセリング技法②	来談者中心療法他
	11	カウンセリングの実践①	グループワーク、カウンセリングの実践
	12	カウンセリングの実践②	グループワーク、カウンセリングの実線
	13	社会を取り巻く諸問題①	グループワーク
	14	社会を取り巻く諸問題②	グループワーク
	15	まとめ、自己分析	総括、エゴグラム
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 			

授業計画(シラバス)

科目名	プレゼンテーション学Ⅱ			指導担当者名	渡邊 智恵	
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学生		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	15時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○説得力を持った、相手に伝わる発表(プレゼンテーション)ができるよう、資料作成能力を身に付け、発表の仕方を学ぶ。					
評価方法 評価基準	作成資料、レポート提出、発表会への参加状況を加味して100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	担当教員作成の資料による					
授業外学習の方法	指導担当者の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目			内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	レジュメ作成について			膨大な資料からレジュメを作成するポイントを学ぶ	
	2	レジュメ作成について			実際のレジュメ作成	
	3	発表の仕方			声の出し方、表情、スピード等、聞きやすい、説得力のある発表の練習	
	4	発表の仕方				
	5	資料作成			発表会に向け資料作成	
	6	資料、原稿作成			発表会に向け原稿、スライド作成	
	7	発表会、相互評価			発表会実施、学生間での相互評価	
	8	フィードバック			教員よりフィードバック	
	9					
	10					
	11					
	12					
	13					
	14					
	15					
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	対人関係論			指導担当者名	吉田 寿晃	
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	医療従事者として必要な対人関係、対人行動(コミュニケーション含む)を理解し、円滑な臨床実習を営めるよう、社会人としての素養を身に付ける。					
評価方法 評価基準	学習評価は、レポート提出、ペーパーテストにて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材						
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目			内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	オリエンテーション			ガイダンス、心理学的知識	
	2	他者との出会い			第一印象の要因、レポート形成	
	3	他者との出会い			年代別に他者との出会いに必要な要因	
	4	他者への態度と行動			態度と行動、話し方等振り返り	
	5	他者への態度と行動			人からの影響、自分が与える影響	
	6	円滑なコミュニケーション			コミュニケーション概要	
	7	円滑なコミュニケーション			成人とのコミュニケーション	
	8	円滑なコミュニケーション			小児とのコミュニケーション	
	9	円滑なコミュニケーション			障害者とのコミュニケーション	
	10	他者との関係性			患者との初回面接について	
	11	他者との関係性			面接シート作成	
	12	他者との関係性			面接シート作成	
	13	コミュニケーションの実際			初回面接の実施	
	14	コミュニケーションの実際			初回面接の実施	
	15	コミュニケーションの実際			振り返り、講評	
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	救急学			指導担当者名	高橋利行
実務経験	救急救命士			ST実務:	無
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	15時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○応急手当を理解し、実践できる。 ○心肺蘇生を理解し、実践できる。 ○医療従事者と一般市民の心肺蘇生の方法について違いを理解する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験(ペーパーテスト)にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	応急手当講習テキスト(救急車がくるまでに)/東京法令出版株式会社				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	応急手当の基礎知識		応急手当の基礎知識を学ぶ	
	2	救命処置について①		救命処置の基礎知識を学ぶ	
	3	救命処置について②		胸骨圧迫実技	
	4	救命処置について③		止血法、固定法、保温法	
	5	救命処置について④		人工呼吸	
	6	救命処置について⑤		体位管理、搬送、異物除去	
	7	救命処置について⑥		自動体外式除細動器体験	
	8	救命処置について⑦		乳児、小児の救命	
	9				
	10				
	11				
	12				
	13				
	14				
	15				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	看護学				指導担当者名	千葉智子	
実務経験	看護師					ST実務:	無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年		
授業方法	講義:○		演習:		実習:		実技:
単位数	1単位	総時間数	15時間	週時間数	2時間		
学習到達目標	○看護師の定義を理解し看護師の役割を知る。 ○生活環境、療養生活に必要な支援と方法を学ぶ。						
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験(ペーパーテスト)にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)						
使用教材	配布資料						
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。						
学期	ターム	項目			内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	看護師の定義と役割について			定義、役割、実際の仕事内容		
	2	生活環境を整える			ベッドメイキングの実践		
	3	療養生活における健康チェック			バイタルサインチェック		
	4	安全管理			医療従事者における温泉管理の必要性について		
	5	ターミナルケア			ターミナルケアについて(動画)		
	6	喀痰吸引			口腔・鼻腔		
	7	喀痰吸引			気管カニューレ		
	8	他職種連携を考える			STと看護師の関わり、他職種連携を考える		
	9						
	10						
	11						
	12						
	13						
	14						
	15						
履修上の留意点							
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 							

授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚療法の基盤Ⅱ			指導担当者名	専任教員4名
実務経験	齋藤：歯科医師 医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務：	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習目標	○課題解決型学習(PBL)とし、1、2年で学んだ知識を活用したグループワークの実践により医療現場、言語聴覚士をより深く理解する。				
評価方法	学習評価は、報告書提出、課題提出、ペーパーテストを総合し、100点法で点数化して行う。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	ガイダンス		授業の内容、進め方の説明	
	2	基礎医学復習①		専門分野に関与する基礎医学的知識の復習①	
	3	基礎医学復習②		専門分野に関与する基礎医学的知識の復習②	
	4	専門分野復習①		高次脳機能障害学(失語症含む)復習	
	5	専門分野復習②		高次脳機能障害学(失語症含む)復習	
	6	専門分野復習③		高次脳機能障害学(失語症含む)復習	
	7	専門分野復習④		高次脳機能障害学(失語症含む)復習	
	8	専門分野復習⑤		運動障害性構音障害学、嚥下障害学復習	
	9	専門分野復習⑥		運動障害性構音障害学、嚥下障害学復習	
	10	専門分野復習⑦		小児分野復習	
	11	模擬試験の実施		模擬試験の実施(100問)	
	12	模擬試験の実施		模擬試験の実施(100問)	
	13	模擬試験振り返り		模擬試験振り返り、解説作り	
	14	模擬試験振り返り		模擬試験振り返り、解説作り	
	15	解説		教員より解説、まとめ、講評	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークを基盤とした授業であるため、事前予習を行うこと。 ・グループ内では積極的な意見交換を心掛けること。 ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	内科学			指導担当者名	今田 剛
実務経験	医師				ST実務: 無
開講時期	前期	対象学科学年		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○言語聴覚士が知っておくべき内科系各疾患の病態・症候を説明できる。また、治療として重要な薬物療法について基本的な知識を習得する。さらに各疾患と栄養との関連、予防としての栄養の考え方を身に付ける。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	ビジュアルノート、病気の地図帳、からだの地図帳				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業 計画 前期	1	消化器疾患①	食道アカラシア、食道癌、胃十二指腸潰瘍、胃癌		
	2	消化器疾患②	急性・慢性肝炎、肝硬変、門脈圧亢進症		
	3	消化器疾患③	胆石症、膵炎、急性虫垂炎		
	4	心疾患①	心不全、心房細動、狭心症、心筋梗塞		
	5	心疾患②	心臓弁膜症、先天性心疾患、感染性心内膜炎		
	6	循環器系疾患	大動脈瘤、大動脈炎症候群、閉塞性動脈硬化症、深部静脈血栓症		
	7	内分泌疾患①	本態性・二次性高血圧症、巨人症、尿崩症 高プロラクチン血症		
	8	内分泌疾患②	バセドウ病、橋本病、副甲状腺機能亢進症・低下症、クッシング症候群		
	9	内分泌疾患③	原発性アルドステロン症、アジソン病、褐色細胞腫、糖尿病、痛風		
	10	泌尿器系疾患	急性・慢性腎不全、糸球体腎炎、腎盂腎炎、前立腺肥大症		
	11	アレルギー性疾患	アレルギー性疾患、関節リウマチ、 全身性エリトマトーデス、他		
	12	血液疾患	各種貧血、白血病、血友病		
	13	感染症他	性感染症、AIDS、食中毒、破傷風、水頭症、带状疱疹		
	14	換気障害①	インフルエンザ、肺炎、肺換気障害、 、気管支喘息		
	15	換気障害②	びまん性汎細気管支炎、肺線維症、肺癌、自然気胸		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	小児科学			指導担当者名	齋藤 順子
実務経験	歯科医師				ST実務: 無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士2年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○新生児期から小児期までの正常発達を学び、小児に特有の疾患を理解し、治療として重要な薬物療法について基本的な知識を習得する。さらに小児の正常発達に欠かせない栄養との関係性を学ぶ。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	概要		概要	
	2	成長と発達①		身体の正常発達、精神運動発達	
	3	成長と発達②		反射の発達、各臓器の発達	
	4	栄養		母乳栄養、ビタミン	
	5	小児保健		予防接種、乳幼児健診、マスキリング	
	6	新生児疾患		新生児の生理、けいれん、黄疸、新生児仮死	
	7	先天異常		遺伝子の異常、染色体の異常、母子感染症	
	8	呼吸器・循環器疾患		クループ症候群、急性細気管支炎 マイコプラズマ肺炎、心疾患	
	9	血液疾患		貧血、白血病、出血性疾患	
	10	悪性腫瘍		概要、頻度、腎芽腫、神経芽腫、悪性リンパ腫	
	11	腎・泌尿器疾患		急性糸球体腎炎、ネフローゼ症候群、Alport症候群	
	12	神経疾患		熱性けいれん、憤怒けいれん、てんかん	
	13	運動器疾患		フロッピーインファント、筋ジストロフィー	
	14	アレルギー疾患、膠原病		アレルギーの分類、各論、若年性関節リウマチ	
	15	感染症		小児感染症の特徴、発熱と発疹の特徴を示す疾患	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	リハビリテーション医学	指導担当者名	泉山 仁		
実務経験	医師			ST実務:	無
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年		
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○脳画像の見方を習得し、脳神経外科を理解しながら、現場のリハビリテーションを学ぶ。				
評価方法 評価基準	学習評価は、課題レポート(症例に対するリハビリテーション計画の立案)の評価にて行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A, ・高い程度に達成しているもの…B, ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)				
使用教材	担当教員作成の資料による				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	脳神経外科とは	神経学の診かた、神経系の復習		
	2	脳卒中総論	脳卒中の考え方		
	3	脳卒中各論	脳梗塞について		
	4	脳卒中各論	脳出血、クモ膜下出血について		
	5	画像診断①	頭部CTの診かた		
	6	画像診断②	頭部CTの診かた		
	7	脳損傷	頭部外傷、脳腫瘍について		
	8	循環障害	未破裂動脈瘤について		
	9	小テスト	脳画像の診かた、振り返り小テスト、解説		
	10	手術	脳腫瘍手術の実際		
	11	ケア体制①	脳卒中ケアユニット		
	12	ケア体制②	脳卒中ケアユニット		
	13	まとめ	脳卒中について 振り返り		
	14	小テスト	小テスト、解説		
	15	症例検討	レポート作成について		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床神経学			指導担当者名	今田 剛
実務経験	医師				ST実務: 無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○言語聴覚士が知っておくべき脳神経系各疾患の病態・症候を説明できる。また、治療として重要な薬物療法について基本的な知識を習得する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	病気がみえるvol. 7 脳・神経 (MEDIC MEDIA)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	神経系の復習	中枢神経、末梢神経系の解剖生理の復習		
	2	脳血管障害①	脳出血、脳梗塞		
	3	脳血管障害②	脳動脈瘤、クモ膜下出血、脳動静脈奇形、もやもや病		
	4	脳血管障害③	水頭症、頭蓋内圧亢進症、脳ヘルニア		
	5	脳血管障害④	脳画像の見方①、治療薬について		
	6	運動と感覚の異常	錐体路徴候、錐体外路徴候、脊髄損傷		
	7	末梢神経障害、脱髄疾患	ギランバレー症候群、ニューロパチー、多発性硬化症		
	8	神経変性疾患①	筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症		
	9	神経変性疾患②	パーキンソン病、パーキンソン症候群		
	10	筋疾患	筋ジストロフィー、重症筋無力症		
	11	感染性疾患	髄膜炎、脳炎、プリオン病		
	12	認知症	アルツハイマー型、レビー小体型、脳血管性、前頭側頭型		
	13	頭痛、てんかん	頭痛、てんかん		
	14	脳腫瘍、脳外傷	脳腫瘍、脳外傷		
	15	検査	脳画像の見方②、SPECT、PET、MRIなど		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床心理学	指導担当者名	佐藤 明宏
実務経験	公認心理士		ST実務: 無
開講時期	通年	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間 週時間数 4時間
学習到達目標	<p>○臨床心理学の基礎理論をもとに、発達段階各期の問題や介入方法、精神障害について学ぶことを通して医療現場等において患者様に寄り添える専門家としての資質を涵養する。</p> <p>○本授業では臨床心理学のエッセンスを学ぶことで様々な側面から問題を考えて対応できる人材を涵養するとともに、臨床心理士や公認心理士といった心理職についての理解も深め、互いの専門性を尊重し専門家同士でより良い協働が図れるような言語聴覚士像を描いていただく。専門家の卵としての自覚を持って学んでいただきたい。</p>		
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、定期試験に、授業受講態度、関心意欲、中間レポート課題の提出状況を加味して100点法で評点する。</p> <p>100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。</p> <p>・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)</p>		
使用教材	下山晴彦 編 「よくわかる臨床心理学」(ミネルヴァ書房)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 通年 (前期)	1	臨床心理学とは	臨床心理学について
	2	人の心と性格	心の構造論、パーソナリティ(類型論)
	3	人の心と性格	パーソナリティ(特性論、ビッグファイブなど)
	4	基礎理論	ナラティブとエビデンス
	5	基礎理論	エンパワーメント、コラボレーション
	6	心理アセスメント	データの収集方法①
	7	心理アセスメント	データの収集方法②
	8	心理アセスメント	データの分析方法
	9	傾聴練習	面接法としての傾聴
	10	傾聴練習	マイクロカウンセリング
	11	傾聴練習	ロールプレイ
	12	異常心理学	正常と異常
	13	異常心理学	薬物療法
	14	異常心理学	薬物療法②
	15	異常心理学	不安障害
	16		
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 			

授業計画(シラバス)

科目名	臨床心理学			指導担当者名	佐藤 明宏
実務経験	公認心理士				ST実務: 無
開講時期	通年		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○		演習:		実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	4時間
学習到達目標	<p>○臨床心理学の基礎理論をもとに、発達段階各期の問題や介入方法、精神障害について学ぶことを通して医療現場等において患者様に寄り添える専門家としての資質を涵養する。</p> <p>○本授業では臨床心理学のエッセンスを学ぶことで様々な側面から問題を考えて対応できる人材を涵養するとともに、臨床心理士や公認心理師といった心理職についての理解も深め、互いの専門性を尊重し専門家同士でより良い協働が図れるような言語聴覚士像を描いていただく。専門家の卵としての自覚を持って学んでいただきたい。</p>				
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、定期試験に、授業受講態度、関心意欲、中間レポート課題の提出状況を加味して100点法で評点する。</p> <p>100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。</p> <p>・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)</p>				
使用教材	下山晴彦 編 「よくわかる臨床心理学」(ミネルヴァ書房)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 通年 (後期)	16	異常心理学		パーソナリティ障害、解離性障害	
	17	異常心理学		うつ、躁、統合失調症	
	18	発達障害		自閉スペクトラム症、ADHD、LDなど	
	19	発達過程で生じる障害や問題		不登校、いじめ、非行	
	20	心理療法		基本理論	
	21	心理療法		ロジャーズ、パールズ、エリス	
	22	心理療法		精神分析	
	23	心理療法		認知行動療法	
	24	心理療法		芸術療法	
	25	心理療法		日本で生まれた心理療法	
	26	心理療法		集団療法、家族療法、コミュニティアプローチ	
	27	アセスメント演習		各種検査と分析方法	
	28	アセスメント演習		データをもとにした支援構築	
	29	アセスメント演習		検査と支援と協働について	
30	社会と臨床		社会における心理臨床、言語聴覚士の倫理		
31					
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚障害診断学	指導担当者名	専任教員4名
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		ST実務: 有
開講時期	後期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間 週時間数 8時間
学習到達目標	○各リハビリテーション期(疾病、対応、関係職種等)について学び、症例の評価から、問題点抽出、分析、訓練目標やプログラムの立案ができる。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験(ペーパーテスト)にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	医学書院 言語聴覚障害概論、失語症第3版		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 後期	1	急性期①	急性期とは
	2	急性期②	失語症
	3	急性期③	摂食嚥下障害
	4	急性期④	高次脳機能障害
	5	急性期⑤	危険予知訓練①概要
	6	急性期⑥	危険予知訓練②演習
	7	脳画像①	脳の解剖
	8	脳画像②	脳画像の基礎知識
	9	脳画像③	脳画像の読影①
	10	回復期①	脳画像の読影②
	11	回復期②	回復期とは
	12	回復期③	臨床業務の流れ
	13	回復期④	成人のスクリーニングテスト、インテーク面接①
	14	回復期⑤	成人のスクリーニングテスト、インテーク面接②
	15	回復期⑥	成人のスクリーニングテスト、インテーク面接③
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 			

授業計画(シラバス)

科目名	言語聴覚障害診断学			指導担当者名	専任教員4名
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	8時間
学習到達目標	○各リハビリテーション期(疾病、対応、関係職種等)について学び、症例の評価から、問題点抽出、分析、訓練目標やプログラムの立案ができる。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験(ペーパーテスト)にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	医学書院 言語聴覚障害概論、失語症第3版				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	16	回復期⑦		失語症と他疾患の鑑別(認知症)	
	17	回復期⑧		失語症と他疾患の鑑別(運動障害性構音障害)	
	18	回復期⑨		失語症と他疾患の鑑別(発語失行)	
	19	維持期①		維持期とは	
	20	維持期②		維持期リハビリテーションの問題点①	
	21	維持期③		維持期リハビリテーションの問題点②	
	22	維持期④		AMSDの概要、注意点	
	23	維持期⑤		AMSDの概要、解釈	
	24	維持期⑥		ケースワーク(症例からの解釈、分析、訓練)①	
	25	維持期⑦		ケースワーク(症例からの解釈、分析、訓練)②	
	26	小児期①		評価の目的と方法	
	27	小児期②		情報収集と行動観察	
	28	小児期③		検査結果のまとめ	
	29	小児期④		検査結果の解釈	
	30	小児期⑤		特徴的な症例(症例からの解釈、分析、訓練)	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	失語症学Ⅱ			指導担当者名	寺内義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期	対象学科学年		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○失語症の訓練や訓練技法について学び、適切な訓練を検討することができる。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学 第3版 (医学書院) 配布資料				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	臨床の流れ		言語聴覚療法の流れ(確認)	
	2	失語症訓練技法①		刺激法・遮断除去法	
	3	失語症訓練技法②		機能再編成法、行動変容法、PACE	
	4	機能回復訓練①		語彙障害、構文障害、音韻・文字に対する訓練①	
	5	機能回復訓練②		語彙障害、構文障害、音韻・文字に対する訓練②	
	6	機能回復訓練③		語彙障害、構文障害、音韻・文字に対する訓練③	
	7	問題点の整理と訓練立案		ICFを用いた問題点の整理と訓練の立案	
	8	失語症訓練技法③		認知神経心理学的アプローチ(確認)	
	9	訓練の具体例①		理解面の訓練の具体例と検討	
	10	訓練の具体例②		表出面の訓練の具体例と検討	
	11	ケースワーク①		評価結果から適切な訓練を考える(グループワーク)	
	12	ケースワーク②		訓練の立案と準備、訓練練習 (グループワーク)	
	13	ケースワーク③		訓練の立案と準備、訓練練習 (グループワーク)	
	14	ケースワーク④		グループワーク発表	
	15	まとめ			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	失語症学演習			指導担当者名	寺内 義貴	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	通年		対象学科学年		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:		演習:○		実習:	
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	4時間	
学習到達目標	○失失語症に対する臨床の流れや言語機能面の評価についての知識を学び、深める。加えて、失語症検査の演習を通して、適切な評価が行うための技術を体得する。					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学 第3版 (医学書院) 配布資料					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	失語症状・関連症状振り返り		失語症の症状・関連症状について振り返り		
	2	各期臨床の流れ①		急性期臨床について		
	3	各期臨床の流れ②		回復期・維持期臨床について		
	4	初回面接時の情報収集 関連職種からの情報収集		評価時の情報収集について		
	5	言語処理のメカニズム①		言語処理モデルについて 聴覚的理解の処理		
	6	言語処理のメカニズム②		呼称の処理		
	7	言語処理のメカニズム③		復唱の処理		
	8	言語処理のメカニズム④		読解・音読の処理		
	9	言語処理のメカニズム⑤		書称・書き取りの処理		
	10	言語処理のメカニズム⑥		言語処理まとめ		
	11	総合的失語症検査について 標準失語症検査①		SLTA、WABなど総合的検査について SLTAの目的、特徴の解説		
	12	標準失語症検査②		「聞く」の下位項目練習		
	13	標準失語症検査③		「話す」の下位項目練習		
	14	標準失語症検査④		「読む」の下位項目練習		
	15	標準失語症検査⑤		「書く」の下位項目練習		
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	失語症学演習			指導担当者名	寺内 義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	通年		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:		演習:○		実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○失失語症に対する臨床の流れや言語機能面の評価についての知識を学び、深める。加えて、失語症検査の演習を通して、適切な評価が行うための技術を体得する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 失語症学 第3版(医学書院) 配布資料				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	16	標準失語症検査⑥		標準失語症検査まとめ 「計算」の下位項目練習	
	17	WAB失語症検査①		WAB失語症検査の特徴・内容の解説、自発話	
	18	WAB失語症検査②		話し言葉の理解・復唱・呼称	
	19	WAB失語症検査③		読み・書字・行為・構成・視空間行為・計算	
	20	掘り下げ検査について		掘り下げ検査の種類、概要	
	21	重度失語症検査①		重度失語症検査の特徴・内容の解説、 導入部・PART I 演習	
	22	重度失語症検査②		PART I ～Ⅲ 演習	
	23	重度失語症検査③		PART I ～Ⅲ 演習	
	24	標準失語症検査補助テスト①		SLTA-STの特徴・内容の説明、発声発語器官および構音の検査	
	25	標準失語症検査補助テスト②		yes-no応答、金額および時間の計算、 まんがの説明、長文の理解、呼称	
	26	失語症語彙検査①		失語症語彙検査の特徴・内容の説明、 語彙判断検査	
	27	失語症語彙検査②		名詞・動詞検査、類義語判断検査、 意味カテゴリー別名詞検査	
	28	その他の掘り下げ検査①		SALA失語症検査・トークンテストなど掘り下げ検査の特徴・内容の確認	
	29	その他の掘り下げ検査②		SALA失語症検査・トークンテストなど掘り下げ検査の特徴・内容の確認	
	30	まとめ		まとめ	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	高次脳機能障害学 I			指導担当者名	渡邊 智恵
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○高次脳機能障害の各障害の基本理念・責任病巣・症状を理解する。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験(ペーパーテスト)にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第3版(医学書院)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	概要		授業スケジュール説明、高次脳機能障害とは	
	2	高次脳機能障害に関わる神経系		大脳の機能局在、神経ネットワーク	
	3	視覚認知の障害①		皮質盲、視覚失認	
	4	視覚認知の障害②		同時失認、相貌失認、色彩認知の障害	
	5	視空間認知の障害①		半側空間無視、地誌的見当識障害	
	6	視空間認知の障害②		パリント症候群、構成障害、視覚性運動失調	
	7	聴覚認知、触覚認知の障害		皮質聾、聴覚失認、触覚失認、ゲルストマン症候群	
	8	行為の障害①		観念運動失行、観念失行、肢節運動失行	
	9	行為の障害②		口部顔面失行、着衣失行、習熟動作の解放現象	
	10	記憶の障害①		記憶の分類、記憶障害の症状	
	11	記憶の障害②		記憶障害の原因とメカニズム、種類、評価、訓練	
	12	脳梁離断症候群		脳梁離断症候群のメカニズムと特徴的な症状	
	13	認知症①		認知症の定義と代表的な認知症	
	14	認知症②		認知症の評価	
	15	国試問題へ挑戦、解説			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	高次脳機能障害学Ⅱ			指導担当者名	渡邊 智恵
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○高次脳機能障害によるADLや社会生活の困難さを理解する。 ○高次脳機能障害の評価・訓練について理解を深め、リハビリ計画を立案できる。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験(ペーパーテスト)にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第3版/医学書院				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	高次脳機能障害 概説		症状、解剖学的観点、脳神経生理学的観点	
	2	高次脳機能障害 検査概論①		神経心理検査の種類と活用	
	3	高次脳機能障害 検査概論②		高次脳機能障害における評価方法	
	4	注意障害 概論		症状、ADLへの影響	
	5	注意障害 評価・解釈・訓練		注意障害を評価する検査法、訓練について	
	6	半側空間無視 概論		症状、ADLへの影響	
	7	半側空間無視 評価・解釈・訓練		半側空間無視を評価する検査法、訓練について	
	8	記憶障害 概論		症状、ADLへの影響	
	9	記憶障害 評価・解釈・訓練		記憶障害を評価する検査法、訓練について	
	10	遂行機能障害 概論		症状、ADLへの影響	
	11	遂行機能障害 評価・解釈・訓練		遂行機能障害を評価する検査法、訓練について	
	12	症例検討①		脳画像、評価、訓練を考える①	
	13	症例検討②		脳画像、評価、訓練を考える②	
	14	高次脳機能まとめ		総括、臨床推論、最新トピック	
	15	国家試験問題に挑戦		国家試験問題解説	
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	高次脳機能障害学演習				指導担当者名	渡邊 智恵	
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり					ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年		
授業方法	講義:		演習:○		実習:		実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間		
学習到達目標	○高次脳機能障害によるADLや社会生活の困難さを理解する。 ○高次脳機能障害の評価・訓練について理解を深め、リハビリ計画を立案できる。						
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)						
使用教材	標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第3版/医学書院、各種検査マニュアル						
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。						
学期	ターム	項目			内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	発症～生活に戻るまで			動画視聴、レポート作成(症状とアプローチ、感想)		
	2	前頭葉と高次脳機能障害①			前頭葉と高次脳機能障害について		
	3	前頭葉と高次脳機能障害②			前頭葉と高次脳機能障害について		
	4	検査演習①			WAIS-III		
	5	検査演習②			レーブン、コース		
	6	検査演習③			HDS-R、MMSE		
	7	検査演習④			三宅式、ベントン、リバーミード、WMS-R		
	8	検査演習⑤			VPTA		
	9	検査演習⑥			SPTA		
	10	検査演習⑦			BIT		
	11	検査演習⑧			CAT、TMT		
	12	検査演習⑨			BADS、FAB		
	13	症例検討①			症例A様、評価と解釈		
	14	症例検討②			症例B様、評価と解釈		
	15	まとめ					
	16						
履修上の留意点							
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。							

授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害学Ⅱ			指導担当者名	鏡 昭子
実務経験	医療機関・介護施設での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○正常発達を理解する。 それをふまえて、知的障害の定義・臨床症状・支援の仕方を理解し、言語評価・指導目標・指導プログラムが立案できるようにする。				
評価方法 評価基準	学習評価は、授業参加姿勢、グループワークの予習・発表、ペーパーテスト 上記をもとに総合評価をする。定期試験とレポートにより100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	配布資料				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業 計画 前期	1	オリエンテーション		概要、講義の進め方	
	2	言語発達とは		ことばの発達、しくみ、基盤について	
	3	0歳児の発達状態		グループ発表	
	4	1歳児の発達状態		グループ発表	
	5	2歳児の発達状態		グループ発表	
	6	3歳児の発達状態		グループ発表	
	7	4歳児の発達状態		グループ発表	
	8	5～6歳児の発達状態		グループ発表	
	9	正常児の言語評価		正常児の言語発達の評価	
	10	正常児の言語評価		正常児の言語発達の評価	
	11	発達障害の分類・評価・支援		発達障害の分類・評価の目的と方法・支援の仕組み	
	12	知的障害とは		グループ発表	
	13	知的障害児の評価・目標・指導		動画を見て評価・目標・指導計画をまとめる	
	14	知的障害児の評価・目標・指導		動画を見て評価・目標・指導計画をまとめる	
	15	まとめ			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害学Ⅲ			指導担当者名	渡邊 智恵
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○脳性麻痺の概要(基礎知識)、治療・療育について学ぶ				
評価方法 評価基準	学習評価は、レポート、ペーパーテストにて行い総合的に評価し、100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚療法シリーズ 改訂言語発達障害Ⅲ 建帛社				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	ガイダンス、定義		授業概要、定義、分類	
	2	運動特徴		正常な運動発達とCPの運動特徴	
	3	基礎知識		原因、診断	
	4	合併症①		知的障害、てんかん、感覚障害など	
	5	合併症②		知的障害、てんかん、感覚障害など	
	6	合併症③		合併症状と言語聴覚障害	
	7	CPの言語発達		言語面の特徴	
	8	情報収集について		情報収集の仕方、項目	
	9	評価①		臨床的評価と客観的評価	
	10	評価②		CPの評価	
	11	評価③		CPの評価	
	12	評価④		CPの評価	
	13	評価⑤		嚥下機能の評価	
	14	訓練①		訓練について	
	15	訓練②		訓練について	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害学Ⅳ			指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○発達障害児の言語の各側面、各障害について理解し、特性に合わせたプログラムの考え方を学ぶ				
評価方法 評価基準	学習評価は、ペーパーテストにて行い評価し、100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	配布資料				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	発達障害とは	発達障害の確認、捉え方		
	2	発達障害者支援法について	法の概要と軽度発達障害について		
	3	発達障害を捉える枠組み	阻害要因、コミュニケーション障害		
	4	発達障害を捉える枠組み	処理過程、サブタイプ		
	5	TEACCHプログラム	問題行動に対する対策		
	6	症例検討	自閉症のコミュニケーション指導		
	7	症例検討	LD 文字学習について		
	8	症例検討	LD 文字学習について		
	9	AACについて	STに求められる専門性		
	10	AACについて	ローテク・ノンテクコミュニケーション		
	11	AACについて	ハイテクコミュニケーション		
	12	AACについて	コミュニケーションボードの指導について		
	13	症例検討	ADHD		
	14	症例検討	ADHD		
	15	まとめ			
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害学演習			指導担当者名	佐藤 理悦
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:	演習:○		実習:	実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○小児の評価に必要な検査の実施方法、結果の解釈を学ぶ				
評価方法 評価基準	学習評価は、実技試験、ペーパーテストにて総合的評価し、100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚士のための言語発達障害学 医歯薬出版				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査①		概要	
	2	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査②		検査の実施手続き、注意点	
	3	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査③		記号形式-支持内容関係①	
	4	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査④		記号形式-支持内容関係②	
	5	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑤		記号形式-支持内容関係③	
	6	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑥		基礎的プロセス	
	7	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑦		コミュニケーション態度	
	8	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑧		質問紙	
	9	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑨		症状分類	
	10	国リハ式S-S法言語発達遅滞検査⑩		症状分類	
	11	PVT-R①		PVT-Rの実際と結果の解釈	
	12	PVT-R②		PVT-Rの実際と結果の解釈	
	13	質問応答関係検査①		質問応答関係検査の実際と結果の解釈	
	14	質問応答関係検査②		質問応答関係検査の実際と結果の解釈	
	15	質問応答関係検査③		質問応答関係検査の実際と結果の解釈	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	言語発達障害学演習			指導担当者名	佐藤 理悦
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:	演習:○		実習:	実技:
単位数	2単位	総時間数	60時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○小児の評価に必要な検査の実施方法、結果の解釈を学ぶ				
評価方法 評価基準	学習評価は、実技試験、ペーパーテストにて総合的評価し、100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚士のための言語発達障害学 医歯薬出版				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	16	遠城寺式乳幼児分析的発達検査①		検査の実際と結果の解釈	
	17	遠城寺式乳幼児分析的発達検査②		検査の実際と結果の解釈	
	18	津守式乳幼児発達検査		検査の実際と結果の解釈	
	19	新版K式発達検査①		検査の実際	
	20	新版K式発達検査②		検査の実際	
	21	新版K式発達検査③		検査の実際	
	22	新版K式発達検査④		検査の解釈	
	23	新版K式発達検査⑤		検査の解釈	
	24	インリアルアプローチ		基本理念と実際	
	25	ポーターズプログラム		ポーターズプログラムの概要と解釈	
	26	WISC-IV①		検査概要	
	27	WISC-IV②		検査の実際と結果の解釈	
	28	WISC-IV③		検査の実際と結果の解釈	
	29	WISC-IV IV		検査の実際と結果の解釈	
30	まとめ				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	音声障害			指導担当者名	寺内義貴
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○音声障害の定義、評価、訓練法、音声障害をきたす疾患について学び、それぞれの特徴を説明できる。また無喉頭音声についてもそれぞれの特徴を理解し、説明できるようにする。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて行い100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	言語聴覚療法シリーズ 改訂 音声障害 (建帛社)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	音声障害の定義		音声障害の定義、分類	
	2	声の特性、声のトラブル		声の4要素 声の使用と問題	
	3	音声障害疾患①		器質性音声障害をきたす疾患	
	4	音声障害疾患②		器質性音声障害をきたす疾患	
	5	音声障害疾患③		神経学的音声障害、機能的音声障害をきたす疾患	
	6	音声障害の評価法①		GRBAS尺度 嚔声とその特徴 モーラ法 VHI	
	7	音声障害の評価法②		喉頭・声帯振動を観察する機器について	
	8	音声障害の治療①		音声治療の定義、直接・間接訓練と治療の流れ	
	9	音声障害の治療②		音声治療の適応 声の衛生指導	
	10	音声障害の治療③		直接訓練	
	11	音声外科手術①		喉頭微細手術・喉頭枠組み手術	
	12	音声外科手術②		各手術の特徴の確認 疾患毎の対応	
	13	薬物治療・無喉頭音声①		薬物と対象となる疾患について 喉頭摘出後の問題	
	14	無喉頭音声②		代用音声の特徴	
	15	まとめ		授業まとめ 国家試験問題	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	器質性構音障害			指導担当者名	齋藤 順子	
実務経験	歯科医師				ST実務:	無
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○顔面・口腔の発生を理解する。器質的な問題(主に口唇顎口蓋裂、口腔癌)の原因、病態、治療法を学び、引き起こされる構音障害を理解する。					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	担当教員作成の資料による					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	器質性構音障害とは		手記、動画		
	2	口蓋裂、口唇裂の問題点を考える		グループワーク(問題点を探る)		
	3	顔面・口腔の発生		突起、胚葉、鰓弓		
	4	口蓋裂について		疫学、種類、症状、合併症		
	5	口蓋裂について		疫学、種類、症状、合併症		
	6	口蓋裂について		1次手術		
	7	口蓋裂について		2次手術		
	8	口唇裂について		疫学、種類、症状、合併症		
	9	口唇裂について		1次手術、2次手術		
	10	口唇顎口蓋裂の構音障害		構音障害の特徴とリハビリ		
	11	口腔癌について		腫瘍の概要、口腔癌の特徴		
	12	口腔癌について		種類、分類、		
	13	口腔癌について		手術		
	14	補綴的発音補助装置		種類と適応		
	15	国試問題に挑戦		解き方の考え方を理解する		
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	運動障害性構音障害学Ⅱ			指導担当者名	吾妻 真帆
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年	言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	<p>○ディサースリアに関連する脳神経の働きを理解する。 ディサースリアの概要・運動障害・発話特徴を理解する。 検査方法の手順を理解し、応用的に実施できる。 検査結果の解釈、問題点の抽出、訓練プログラムの立案ができる。 臨床現場でよく用いられる訓練技術について演習して方法を理解できる。</p>				
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)</p>				
使用教材	ディサースリア臨床標準テキスト第2版 (医歯薬出版)				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	概要、脳神経復習		授業概要、脳神経復習	
	2	ディサースリアと脳神経①		ディサースリアに関与する脳神経の働きと見方	
	3	ディサースリアと脳神経②		皮質延髄路とそれに関連する運動障害	
	4	ディサースリアの基礎①		鑑別診断、発話症状	
	5	ディサースリアの基礎②		タイプ分類	
	6	ディサースリアの基礎③		タイプ分類	
	7	評価①		AMSD概要	
	8	評価②		AMSD演習	
	9	評価③		AMSD演習	
	10	評価④		AMSD演習	
	11	評価⑤		AMSD演習	
	12	評価の解釈①		解釈から訓練方法の説明	
	13	評価の解釈②		解釈から訓練方法の説明	
	14	訓練①		臨床でよく用いられる訓練方法演習	
	15	訓練②		臨床でよく用いられる訓練方法演習	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	運動障害性構音障害学演習			指導担当者名	吾妻 真帆	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:		演習:○		実習:	
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	<p>○運動障害性に関する代表的な各種検査を模擬的に実施することができる。 検査結果について分析・統合し、病態と問題点について説明できる。 分析・統合した結果に基づいて訓練プログラムを立案できる。 基本的な訓練手技(代償的手段含む)について模擬的に実施できる。</p>					
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、期末試験50%、小テスト20%、レポート30%として100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)</p>					
使用教材	ディサースリア臨床標準テキスト第2版 (医歯薬出版)					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業 計画 前期	1	オリエンテーション構音障害について振り返り①		発声発語器官の構造と機能について確認する		
	2	構音障害について振り返り②		原因別の構音障害の特徴と関連障害との鑑別		
	3	構音障害について振り返り③		運動障害性構音障害のタイプ分類と発話特徴の整理		
	4	麻痺性構音障害(短縮版)検査①		麻痺性構音障害(短縮版)検査の解説と実技演習		
	5	麻痺性構音障害(短縮版)検査②		麻痺性構音障害(短縮版)検査の解説と実技演習		
	6	標準ディサースリア検査①		標準ディサースリア検査の解説と実技演習		
	7	標準ディサースリア検査②		標準ディサースリア検査の解説と実技演習		
	8	SLTA-ST ①		SLTA-STの解説と実技演習		
	9	SLTA-ST ②		SLTA-STの解説と実技演習		
	10	検査結果の解析①		発声発語器官・機能の分析、構音機能の分析手法について解説する		
	11	検査結果の解析②		聴覚印象評価の解説と聴取演習		
	12	VTR症例について評価		SLTA-STの症例について評価し、検査結果について分析・集約して、レポート作成する(提出)		
	13	機能回復訓練手技①		基本的な機能回復訓練手技について解説と演習		
	14	機能回復訓練手技②		代償的コミュニケーション法を含む訓練法について		
	15	講義のまとめ		授業で学んだ各種検査や訓練技法について振り返り、集約する。		
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	摂食・嚥下障害学Ⅱ			指導担当者名	長谷川賢一
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務： 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義：○	演習：		実習：	実技：
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	<p>○各種評価法と訓練技法について学ぶ。 目標としてはスクリーニング検査の実施と結果について解釈できる。 嚥下造影検査や嚥下内視鏡検査について評価と結果について解釈できる。 さらに各種訓練技法について目的と効果を説明でき、模擬的に実施できる。 吸引の実束手技とリスク管理について説明できる。</p>				
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、期末試験50%、レポート30%、小テスト20%にて総合して100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)</p>				
使用教材	摂食嚥下障害学(医歯薬出版)、配布資料、病態VF・VE検査動画				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	情報収集、臨床的観察、問診の方法とポイント		臨床の流れに基づいた情報収集や臨床観察のポイント	
	2	スクリーニング検査(RSST、MWST)		反復唾液のみ検査、改訂水のみ検査の手技と判定方法、ストップウォッチ、シリンジ、水を準備	
	3	スクリーニング検査(頸部聴診法、フードテスト)		頸部聴診やフードテストの手技と判定方法(聴診器、水、シリンジ、プリンと小スプーン)	
	4	嚥下内視鏡検査と結果の解釈(VTR症例)		嚥下内視鏡検査の手順と評価について	
	5	嚥下造影検査と結果の解釈①(VTR症例)		嚥下造影検査の手順と評価について 病態別症例の嚥下障害の特徴	
	6	嚥下造影検査と結果の解釈②(VTR症例)		病態別症例の嚥下障害の特徴	
	7	嚥下造影検査による評価と解釈(症例提示)		嚥下造影検査評価表に基づき検査結果の評価を行い、レポートを作成する。	
	8	間接訓練手技(器官へのアプローチ、呼吸含む)		各種間接訓練における適応症状、実施方法と効果、リスクについて	
	9	各種の間接訓練の技法		各種間接訓練における適応症状、実施法とその効果、と効果、リスクについて、(綿棒・舌圧子など使用)	
	10	直接訓練(開始手順と各種嚥下法)		各種直接訓練における適応症状、実施法とその効果、リスクについて	
	11	直接訓練(嚥下食と介助法)		各種直接訓練における適応症状、実施法とその効果、リスクについて	
	12	フレイルと認知機能低下への対応		加齢に伴う機能低下と認知機能低下症例への対応方法について	
	13	口腔ケア		口腔ケアの重要性と実施方法について	
	14	吸引手技		吸引手技の基礎知識と手順について(実技込)	
	15	まとめ		授業で学んだ各種検査や訓練技法について振り返り、集約する。	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	摂食・嚥下障害学演習			指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:	演習:○		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間
学習到達目標	○摂食嚥下障害の臨床に向け、基礎的知識の復讐、検査・評価の方法について知識技術を高める。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	医歯薬出版 言語聴覚士のための摂食・嚥下障害				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	摂食嚥下の解剖整理		構造、筋活動	
	2	摂食嚥下のモデル		各摂食嚥下モデルについて、特徴	
	3	誤嚥の種類、合併症		各誤嚥のタイプ分類、摂食嚥下障害の合併症	
	4	臨床技術		摂食嚥下に関する問診	
	5	臨床技術		臨床的観察、フィジカルアセスメント	
	6	臨床技術		RSST、MWST(概要・実演)	
	7	臨床技術		FT、頸部聴診(概要・実演)	
	8	臨床技術		NST、多職種連携	
	9	臨床技術		小児の摂食嚥下療法①	
	10	臨床技術		小児の摂食嚥下療法②	
	11	映像評価		嚥下造影検査①	
	12	映像評価		嚥下造影検査②	
	13	映像評価		嚥下内視鏡検査	
	14	姿勢と嚥下障害		姿勢が与える影響	
	15	姿勢と嚥下障害		ポジショニング	
	16				
履修上の留意点					
・講義や演習内容について予習・復習を行って授業に臨むこと。 ・授業時間内に小テストを行う。 ・レポートなど提出物の期限を守ること。 ・グループ演習の際は人任せにせず、互いに協力して行うこと。 ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	聴覚障害学演習			指導担当者名	吉田 寿晃
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:	演習:○		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	30時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○聴覚系の検査・評価の理論を理解し、手技を身に付ける。 ○平衡機能の検査・評価の理論を理解し、手技を身に付ける。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	聴覚障害学/医学書院				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	評価の概要		ガイダンス、聴覚検査の種類と目的 復習	
	2	聴覚検査①		純音聴力検査	
	3	聴覚検査②		純音聴力検査	
	4	聴覚検査③		純音聴力検査	
	5	聴覚検査④		自記オーディオメトリー	
	6	聴覚検査⑤		自記オーディオメトリー	
	7	聴覚検査⑥		語音聴力検査	
	8	聴覚検査⑦		語音聴力検査	
	9	小テスト		ペーパーテスト、解説	
	10	聴覚検査⑧		インピーダンスオーディオメトリー	
	11	聴覚検査⑨		耳音響放射、聴性脳幹反応検査	
	12	聴覚検査⑩		乳幼児聴力検査	
	13	聴覚検査⑪		乳幼児聴力検査、選別聴力検査	
	14	聴覚検査⑫		選別聴力検査	
	15	平衡機能検査		平衡機能検査	
	16				
履修上の留意点					
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。					

授業計画(シラバス)

科目名	小児聴覚障害学			指導担当者名	北山 泰一	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科2年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	2単位	総時間数	30時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	○小児聴覚障害と言語発達の間係を理解する。 ○小児聴力検査の内容、実施方法を理解する。 ○難聴児に対する指導、援助方法を理解する。					
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版(医学書院)					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	概要、聴覚系の復習		小児の聴覚障害と言語発達への影響		
	2	原因疾患		遺伝性難聴		
	3	原因疾患		後天性難聴		
	4	原因疾患		後天性難聴		
	5	評価		BOA		
	6	評価		COR・VRA		
	7	評価		ピープショウテスト・遊戯聴力検査		
	8	評価		スクリーニング		
	9	評価		ABR		
	10	評価		OAE・ASSR		
	11	指導・訓練		コミュニケーション指導		
	12	指導・訓練		聴能訓練		
	13	指導・訓練		前言語期の指導		
	14	指導・訓練		幼児期の指導		
	15	指導・訓練		学童期の指導・教育体制		
	16					
履修上の留意点						
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。						

授業計画(シラバス)

科目名	成人聴覚障害学	指導担当者名	北山 泰一
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり		ST実務: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科2年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	2単位	総時間数	30時間 週時間数 2時間
学習到達目標	○後天性聴覚障害の原因疾患を理解する。 ○後天性聴覚障害の問題点を理解する ○後天性聴覚障害者への接し方、援助方法を理解する。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第3版(医学書院)		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	概要	後天性聴覚障害とは
	2	原因疾患	後天性聴覚障害の原因となる疾患①
	3	原因疾患	後天性聴覚障害の原因となる疾患②
	4	評価	純音聴力検査
	5	評価	語音聴力検査
	6	評価	自記オーディオメトリー
	7	評価	インピーダンスオーディオメトリー
	8	評価	聴取能力評価
	9	指導・援助	聴能訓練
	10	指導・援助	読話
	11	指導・援助	手話・指文字
	12	指導・援助	ピアグループ、福祉機器
	13	指導・援助	要約筆記
	14	指導・援助	心理面へのサポート
	15	視覚聴覚二重障害	原因疾患、コミュニケーション手段
	16		
履修上の留意点			
・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。			

授業計画(シラバス)

科目名	臨床実習 I			指導担当者名	外部言語聴覚士＋内部教員
実務経験	言語聴覚士業務従事者				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科2年
授業方法	講義:	演習:	実習:○		実技:
単位数	2単位	総時間数	80時間	週時間数	40時間
学習到達目標	<p>○実際の臨床現場を見学することにより、言語聴覚士としての意識や職業内容、業務倫理理解を深め、リハビリテーション職員、病院職員として自覚を高める。 言語聴覚士の業務を通して、対象者との接し方やコミュニケーションの取り方など、言語聴覚士として必要な資質を学ぶ。 言語聴覚障害がある人の問題点や背景について学ぶ。 社会人としての在り方(挨拶、態度など)を学ぶ。加えて、現場における言語聴覚士の役割、多職種との連携を通してチーム医療を学ぶ。</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価は外部指導者の評価(8割)、学内教員による症例報告会の点数(2割)にて行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)</p>				
使用教材	全テキスト参照のこと。				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	時間	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	実習オリエンテーション(ガイダンス)への参加			
	5	臨床場面の見学を通し、ディリーノートの作成と提出を行う。			
	80	症例報告書の作成、レジュメの作成			
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・実習施設は言語聴覚士が業務に従事している医療機関(病院または診療所)又は福祉施設とする。 ・実習時間は、従事する言語聴覚士の勤務時間に順じ、1日8時間とする。 ・実習終了後、実習報告書を学校へ提出する。また、校内で報告会を実施する。 ・実習の5分の4以上の出席がない者には、単位を認定しない。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床実習Ⅱ			指導担当者名	外部言語聴覚士＋内部教員
実務経験	言語聴覚士業務従事者				ST実務： 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科3年
授業方法	講義：	演習：	実習：○		実技：
単位数	4単位	総時間数	160時間	週時間数	40時間
学習到達目標	<p>実習対策で学んだ知識を活かし、外部施設にて言語聴覚療法において必要な検査手技および評価が出来るようになる。また、検査結果を考察したうえで訓練プログラムが立案できるようになる。 現場における言語聴覚士の役割、多職種との連携を通してチーム医療を学ぶ。 言語聴覚士の業務を通して、対象者との接し方やコミュニケーションの取り方など、言語聴覚士として必要な資質を身に着ける。</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価は外部指導者の評価(8割)、学内教員による症例報告会の点数(2割)にて行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)</p>				
使用教材	全テキスト参照のこと。				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	時間	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	実習オリエンテーション(ガイダンス)への参加			
	5	臨床場面の見学を通し、ディリーノートの作成と提出を行う。			
		担当症例の評価を実施し、検査結果のまとめ、考察、訓練プログラムの立案を行う。			
		院内ケースカンファレンスへの参加			
		症例報告書の作成、レジユメの作成			
	160	院内での発表			
<p>履修上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習施設は言語聴覚士が業務に従事している医療機関(病院または診療所)又は福祉施設とする。 ・実習時間は、従事する言語聴覚士の勤務時間に順じ、1日8時間とする。 ・実習終了後、実習報告書を学校へ提出する。また、校内で報告会を実施する。 ・実習の5分の4以上の出席がない者には、単位を認定しない。 					

授業計画(シラバス)

科目名	職業倫理学			指導担当者名	吉田 寿晃・寺内 義貴	
実務経験	医療機関での言語聴覚士業務従事経験あり				ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	実技:
単位数	1単位	総時間数	15時間	週時間数	2時間	
学習到達目標	<p>○「仕事・職業」に関する考えから、STを目指すことの自分を振り返り、今後の勉強の糧とする。</p> <p>①職業倫理と倫理綱領 ②リスクマネジメント ③臨床業務の進め方 ④関連職種間連携 ⑤言語聴覚療法の法的基盤 以上を中心に学ぶ。</p>					
評価方法 評価基準	<p>学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)</p>					
使用教材	<p>「標準言語聴覚障害学言語聴覚障害学概論」(医学書院) 「改訂言語聴覚障害総論Ⅰ」(建帛社)</p>					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目		内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	言語聴覚士と倫理		関連職種の倫理綱領		
	2	医療安全管理とリスクマネジメント		リスクマネジメントの実際		
	3	リハビリ部門における安全管理その1		病期別のリスク管理		
	4	リハビリ部門における安全管理その2		疾患別・病態別のリスク管理		
	5	関連職種連携その1		言語聴覚士の臨床業務と他職種連携		
	6	関連職種連携その2		言語聴覚士の臨床業務と他職種連携		
	7	言語聴覚療法と法的基盤		言語聴覚士の臨床業務と法律		
	8	まとめ		まとめ		
	9					
	10					
	11					
	12					
	13					
	14					
	15					
	16					
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	心理測定法			指導担当者名	高橋 純一
実務経験	大学教授				ST実務: 無
開講時期	後期	対象学科学年		言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	2単位	総時間数	30時間	週時間数	4時間
学習到達目標	○心理学研究の基礎をなす測定法の理論や具体的測定方法について理解し、心理学の各領域を代表する研究から実践的に学ぶ				
評価方法 評価基準	学習評価は、確認テストとまとめ(50%) 期末試験(50%)にて行い、100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	「言語聴覚士のための心理学」 山田弘幸(編著) 医歯薬出版				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	1	心理測定法の基礎①:解説	平均値と分散値, 測定と誤差, 尺度水準(名義・順序・間隔・比率)		
	2	心理測定法の基礎②:調査と分析	レポートの基礎 ※ 課題レポート(度数分布表とヒストグラムの作成)		
	3	精神物理学的測定法①:解説	精神物理学的測定法		
	4	精神物理学的測定法②:実験と分析	実験とレポート ※ 課題レポート(ミュラー・リヤー錯視)		
	5	テスト理論①:解説	テスト理論, 妥当性と信頼性		
	6	テスト理論②:実験と分析	実験とレポート ※ 課題レポート(レーブン色彩マトリクス検査)		
	7	尺度構成法①:解説	評定法, 多次元尺度構成法		
	8	尺度構成法②:実験と分析	実験とレポート ※ 課題レポート(SD法)		
	9	調査法①:解説	研究法(実験法, 調査法, 面接法, 観察法), サンプリングと標本抽出		
	10	調査法②:調査と分析	調査とレポート ※ 課題レポート(学生の睡眠時間調査)		
	11	心理統計法①:解説	平均値の比較(t検定, 分散分析), 因子分析, 重回帰分析		
	12	心理統計法②:実験と分析	結果と考察の記述 ※ 課題レポート(ストループ・逆ストループ課題)		
	13	心理測定法の実際①	代表値と分散, 精神物理学的測定法, テスト理論についての復習		
	14	心理測定法の実際②	尺度構成法, 調査法, 心理統計法についての復習		
	15	まとめ	全体のまとめ		
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・典型的な心理学の実験や検査を実施することがあるため、積極的に参加すること。 ・主にグループ活動をするため、他者に迷惑のかからないようにすること。 ・授業の進度によって、内容が変更される可能性あり。 ・携帯電話は必ずかばんの中に入れて授業を受けること。 ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床実習 I			指導担当者名	外部言語聴覚士＋内部教員
実務経験	言語聴覚士業務従事者				ST実務: 有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科3年
授業方法	講義:	演習:	実習:○		実技:
単位数	4単位	総時間数	160時間	週時間数	40時間
学習到達目標	<p>○実習対策で学んだ知識を活かし、外部施設にて言語聴覚療法において必要な検査手技および評価が出来るようになる。また、検査結果を考察したうえで訓練プログラムが立案できるようになる。</p> <p>○現場における言語聴覚士の役割、多職種との連携を通してチーム医療を学ぶ。</p> <p>○言語聴覚士の業務を通して、対象者との接し方やコミュニケーションの取り方など、言語聴覚士として必要な資質を身に着ける。</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価は外部指導者の評価(8割)、学内教員による症例報告会の点数(2割)にて行う。</p> <p>評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。</p> <p>・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)</p>				
使用教材	全テキスト参照のこと。				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	時間	項目	内容・準備資料等		
授業計画 前期	1	実習オリエンテーション(ガイダンス)への参加			
		臨床場面の見学を通し、ディリーノートの作成と提出を行う。			
	5	担当症例の評価を実施し、検査結果のまとめ、考察、訓練プログラムの立案を行う。			
		院内ケースカンファレンスへの参加			
		症例報告書の作成、レジユメの作成			
	160	院内での発表			
<p>履修上の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習施設は言語聴覚士が業務に従事している医療機関(病院または診療所)又は福祉施設とする。 ・実習時間は、従事する言語聴覚士の勤務時間に順じ、1日8時間とする。 ・実習終了後、実習報告書を学校へ提出する。また、校内で報告会を実施する。 ・実習の5分の4以上の出席がない者には、単位を認定しない。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床実習Ⅱ			指導担当者名	外部言語聴覚士＋内部教員
実務経験	言語聴覚士業務従事者				ST実務： 有
開講時期	前期		対象学科学年		言語聴覚士科3年
授業方法	講義：	演習：		実習：○	実技：
単位数	8単位	総時間数	320時間	週時間数	40時間
学習到達目標	<p>○臨床実習Ⅰ・Ⅱで身に付けた評価スキルを存分に活かし、訓練プログラムの立案を行い、実際の訓練を経験する。 また、再評価により自身で立てた訓練プログラムの信憑性を考察できる力を身に付ける。 ○現場における言語聴覚士の役割、多職種との連携を通してチーム医療を学ぶ。</p>				
評価方法 評価基準	<p>評価は外部指導者の評価(8割)、学内教員による症例報告会の点数(2割)にて行う。 評定は、学習到達目標や内容に照らし次の4段階とする。 ・特に高い程度に達成しているもの…A、 ・高い程度に達成しているもの…B、 ・おおむね達成しているもの…C ・達成が不十分なもの…D(不合格)</p>				
使用教材	全テキスト参照のこと。				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	時間	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	1	実習オリエンテーション(ガイダンス)への参加			
		臨床場面の見学を通し、ディリーノートの作成と提出を行う。			
		担当症例の評価を実施し、検査結果のまとめ、考察、訓練プログラムの立案を行う。			
	5	院内ケースカンファレンスへの参加			
		自身の立てた訓練プログラムに従い、担当症例の評訓練を実施し、再評価を行う。再評価の結果を考察する。			
		症例報告書の作成、レジュメの作成			
	320	院内での発表			
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・実習施設は言語聴覚士が業務に従事している医療機関(病院または診療所)とする。 ・実習時間は、従事する言語聴覚士の勤務時間に順じ、1日8時間とする。 ・実習終了後、実習報告書を学校へ提出する。また、校内で報告会を実施する。 ・実習の5分の4以上の出席がない者には、単位を認定しない。 					

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)				ST実務: 有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科3年
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。				
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	1	専門基礎分野-1		基礎医学	
	2	専門基礎分野-2		基礎医学	
	3	専門基礎分野-3		基礎医学	
	4	専門基礎分野-4		基礎医学	
	5	専門基礎分野-5		基礎医学	
	6	専門基礎分野-6		基礎医学	
	7	専門基礎分野-7		臨床医学	
	8	専門基礎分野-8		臨床医学	
	9	専門基礎分野-9		臨床医学	
	10	専門基礎分野-10		臨床医学	
	11	専門基礎分野-11		臨床医学	
	12	専門基礎分野-12		臨床医学	
	13	専門基礎分野-13		臨床医学	
	14	専門基礎分野-14		臨床医学	
	15	専門基礎分野-15		臨床歯科医学	
	16				
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)			ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年	言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。				
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	16	専門基礎分野-16		臨床歯科医学	
	17	専門基礎分野-17		臨床歯科医学	
	18	専門基礎分野-18		臨床歯科医学	
	19	専門基礎分野-19		臨床歯科医学	
	20	専門基礎分野-20		臨床歯科医学	
	21	専門基礎分野-21		音声・言語・聴覚医学	
	22	専門基礎分野-22		音声・言語・聴覚医学	
	23	専門基礎分野-23		音声・言語・聴覚医学	
	24	専門基礎分野-24		音声・言語・聴覚医学	
	25	専門基礎分野-25		音声・言語・聴覚医学	
	26	専門基礎分野-26		音声・言語・聴覚医学	
	27	専門基礎分野-27		音声・言語・聴覚医学	
	28	専門基礎分野-28		音声・言語・聴覚医学	
	29	専門基礎分野-29		心理学	
30	専門基礎分野-30		心理学		
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)			ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年	言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。				
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目	内容・準備資料等		
授業計画 後期	31	専門基礎分野-31	心理学		
	32	専門基礎分野-32	心理学		
	33	専門基礎分野-33	心理学		
	34	専門基礎分野-34	心理学		
	35	専門基礎分野-35	心理学		
	36	専門基礎分野-36	心理学		
	37	専門基礎分野-37	言語学		
	38	専門基礎分野-38	言語学		
	39	専門基礎分野-39	言語学		
	40	専門基礎分野-40	言語学		
	41	専門基礎分野-41	言語学		
	42	専門基礎分野-42	音声学		
	43	専門基礎分野-43	音声学		
	44	専門基礎分野-44	音声学		
	45	専門基礎分野-45	音声学		
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)			ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年	言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:	実習:	実技:	
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。				
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	46	専門基礎分野-46		音声学	
	47	専門基礎分野-47		音響学	
	48	専門基礎分野-48		音響学	
	49	専門基礎分野-49		音響学	
	50	専門基礎分野-50		音響学	
	51	専門基礎分野-51		音響学	
	52	専門基礎分野-52		言語発達学	
	53	専門基礎分野-53		言語発達学	
	54	専門基礎分野-54		言語発達学	
	55	専門基礎分野-55		言語発達学	
	56	専門基礎分野-56		言語発達学	
	57	専門基礎分野-57		社会福祉・教育	
	58	専門基礎分野-58		社会福祉・教育	
	59	専門基礎分野-59		社会福祉・教育	
60	専門基礎分野-60		社会福祉・教育		
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)			ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年	言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。				
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	61	専門分野-1		失語・高次脳機能障害	
	62	専門分野-2		失語・高次脳機能障害	
	63	専門分野-3		失語・高次脳機能障害	
	64	専門分野-4		失語・高次脳機能障害	
	65	専門分野-5		失語・高次脳機能障害	
	66	専門分野-6		失語・高次脳機能障害	
	67	専門分野-7		失語・高次脳機能障害	
	68	専門分野-8		失語・高次脳機能障害	
	69	専門分野-9		失語・高次脳機能障害	
	70	専門分野-10		失語・高次脳機能障害	
	71	専門分野-11		失語・高次脳機能障害	
	72	専門分野-12		失語・高次脳機能障害	
	73	専門分野-13		失語・高次脳機能障害	
	74	専門分野-14		失語・高次脳機能障害	
	75	専門分野-15		失語・高次脳機能障害	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員	
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)				ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間	
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。					
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目			内容・準備資料等	
授業計画 後期	76	専門分野-16			失語・高次脳機能障害	
	77	専門分野-17			失語・高次脳機能障害	
	78	専門分野-18			失語・高次脳機能障害	
	79	専門分野-19			失語・高次脳機能障害	
	80	専門分野-20			失語・高次脳機能障害	
	81	専門分野-21			言語発達障害学	
	82	専門分野-22			言語発達障害学	
	83	専門分野-23			言語発達障害学	
	84	専門分野-24			言語発達障害学	
	85	専門分野-25			言語発達障害学	
	86	専門分野-26			言語発達障害学	
	87	専門分野-27			言語発達障害学	
	88	専門分野-28			言語発達障害学	
	89	専門分野-29			言語発達障害学	
90	専門分野-30			言語発達障害学		
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員	
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)				ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年		言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○		演習:		実習:	
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間	
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。					
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)					
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他					
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。					
学期	ターム	項目			内容・準備資料等	
授業計画 後期	91	専門分野-31			発声発語・嚙下障害学	
	92	専門分野-32			発声発語・嚙下障害学	
	93	専門分野-33			発声発語・嚙下障害学	
	94	専門分野-34			発声発語・嚙下障害学	
	95	専門分野-35			発声発語・嚙下障害学	
	96	専門分野-36			発声発語・嚙下障害学	
	97	専門分野-37			発声発語・嚙下障害学	
	98	専門分野-38			発声発語・嚙下障害学	
	99	専門分野-39			発声発語・嚙下障害学	
	100	専門分野-40			発声発語・嚙下障害学	
	101	専門分野-41			聴覚障害学	
	102	専門分野-42			聴覚障害学	
	103	専門分野-43			聴覚障害学	
	104	専門分野-44			聴覚障害学	
	105	専門分野-45			聴覚障害学	
履修上の留意点						
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 						

授業計画(シラバス)

科目名	国家試験対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)			ST実務:	有
開講時期	後期		対象学科学年	言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	16単位	総時間数	240時間	週時間数	20時間
学習到達目標	○出題教科の総復習を行い、国家試験合格を目指す。				
評価方法 評価基準	評価は6回の模擬試験結果と課題提出状況にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、STテキスト 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 後期	106	専門分野-46		聴覚障害学	
	107	専門分野-47		聴覚障害学	
	108	専門分野-48		聴覚障害学	
	109	専門分野-49		聴覚障害学	
	110	専門分野-50		聴覚障害学	
	111	専門分野-51		言語聴覚障害総論	
	112	専門分野-52		言語聴覚障害総論	
	113	専門分野-53		言語聴覚障害総論	
	114	専門分野-54		言語聴覚障害総論	
	115	専門分野-55		言語聴覚障害総論	
	116	専門分野-56		言語聴覚障害総論	
	117	専門分野-57		言語聴覚障害総論	
118	専門分野-58		言語聴覚障害総論		
119	専門分野-59		言語聴覚障害総論		
120	専門分野-60		言語聴覚障害総論		
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床実習対策	指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)		ST実務: 有
開講時期	前期	対象学科学年	言語聴覚士科3年
授業方法	講義:○	演習:	実習: 実技:
単位数	6単位	総時間数	90時間 週時間数 10時間
学習到達目標	○臨床実習Ⅰ、Ⅱが円滑に有意義な臨床実習となるよう、知識・技術の再確認を行い、デイリーノートの書き方、報告書の書き方を学ぶ。		
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)		
使用教材	専門分野テキスト、病気がみえる 他		
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。		
学期	ターム	項目	内容・準備資料等
授業計画 前期	1	成人言語聴覚療法	失語症①
	2	成人言語聴覚療法	失語症②
	3	成人言語聴覚療法	失語症③
	4	成人言語聴覚療法	失語症④
	5	成人言語聴覚療法	失語症⑤
	6	成人言語聴覚療法	失語症⑥
	7	成人言語聴覚療法	失語症⑦
	8	成人言語聴覚療法	失語症⑧
	9	成人言語聴覚療法	失語症⑨
	10	成人言語聴覚療法	失語症⑩
	11	成人言語聴覚療法	嚥下障害学①
	12	成人言語聴覚療法	嚥下障害学②
	13	成人言語聴覚療法	嚥下障害学③
	14	成人言語聴覚療法	嚥下障害学④
	15	成人言語聴覚療法	嚥下障害学⑤
履修上の留意点			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 			

授業計画(シラバス)

科目名	臨床実習対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年	言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	6単位	総時間数	90時間	週時間数	10時間
学習到達目標	○臨床実習Ⅰ、Ⅱが円滑に有意義な臨床実習となるよう、知識・技術の再確認を行い、デイリーノートの書き方、報告書の書き方を学ぶ。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A, ・79～70点…B, ・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、病気がみえる 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業 計画 前期	16	成人言語聴覚療法		嚙下障害学⑥	
	17	成人言語聴覚療法		嚙下障害学⑦	
	18	成人言語聴覚療法		嚙下障害学⑧	
	19	成人言語聴覚療法		嚙下障害学⑨	
	20	成人言語聴覚療法		嚙下障害学⑩	
	21	言語発達障害		正常発達、デイリーの書き方	
	22	言語発達障害		症例報告①	
	23	言語発達障害		症例報告②	
	24	言語発達障害		検査練習①	
	25	言語発達障害		検査練習②	
	26	言語発達障害		検査練習③	
	27	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害①	
	28	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害②	
	29	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害③	
	30	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害④	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					

授業計画(シラバス)

科目名	臨床実習対策			指導担当者名	言語聴覚士科教員
実務経験	言語聴覚士(吉田・寺内・吾妻・渡邊)・歯科医師(齋藤)			ST実務:	有
開講時期	前期		対象学科学年	言語聴覚士科3年	
授業方法	講義:○	演習:		実習:	実技:
単位数	6単位	総時間数	90時間	週時間数	10時間
学習到達目標	○臨床実習Ⅰ、Ⅱが円滑に有意義な臨床実習となるよう、知識・技術の再確認を行い、デイリーノートの書き方、報告書の書き方を学ぶ。				
評価方法 評価基準	学習評価は、定期試験にて100点法で評点する。 100点法による評点は、次の基準により4段階に換算する。 ・100～80点…A、・79～70点…B、・69～60点…C ・59～0点…D(不合格)				
使用教材	専門分野テキスト、病気がみえる 他				
授業外学習の方法	担当教員の指示に従い、予習と復習をしっかりと行うこと。				
学期	ターム	項目		内容・準備資料等	
授業計画 前期	31	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害⑤	
	32	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害⑥	
	33	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害⑦	
	34	成人言語聴覚療法		高次脳機能障害⑧	
	35	成人言語聴覚療法		構音障害①	
	36	成人言語聴覚療法		構音障害②	
	37	成人言語聴覚療法		構音障害③	
	38	成人言語聴覚療法		構音障害④	
	39	成人言語聴覚療法		構音障害⑤	
	40	成人言語聴覚療法		構音障害⑥	
	41	成人言語聴覚療法		構音障害⑦	
	42	成人言語聴覚療法		構音障害⑧	
	43	成人言語聴覚療法		症例報告の書き方	
	44	成人言語聴覚療法		症例報告の書き方	
	45	成人言語聴覚療法		症例報告の書き方	
履修上の留意点					
<ul style="list-style-type: none"> ・授業の3分の2以上の出席がない者には、単位を認定しない。 ・対面授業が困難な際は、遠隔授業も併用実施。 					